

幼 兒 教 育



第 十 二 號 十 二 月 號 第 四 十 卷

東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內
日 本 幼 稚 園 協 會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

(再版)

觀察の實際

菊判一三〇頁
定價金壹圓
送東京金六錢
料市內金九錢
其他

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集 (四版)

菊版三五〇頁
定價金壹圓五拾錢
送東京金六錢
料市內金九錢
地方・北海道・臺灣・朝鮮・滿洲
樺太・朝鮮・滿洲

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

系統的保育案の實際 (四版)

定價金壹圓
送料金

幼兒の教育 (月刊)

一ヶ月 金參拾五錢 送料金一錢
一ヶ年 金四圓貳拾錢 送料共

家の教育

誌友大募集

十二月號目次

每號金十錢(郵共)
一ヶ年分金一圓也

卷頭言

十二月の家庭會

母として知つて
おかねばならぬ 國民學校(二)

幼兒の冬の衛生

幼稚園の生活(二)

十二月の保育事項

生活ミ舞踊

母の講座 母性修養

母ミ子供の理科教室

創作・隣組の子供達(一)

童話 シブイ柿アマイ栗

教育 子供のころ(二)

創作 子供の科學の芽

作らせる幼兒紙芝居

幼兒の繪ミ詩

教育相談

家庭訪問記

親心談叢

現品贈呈

見本贈呈
往復ハガキにて御申込
次第贈呈

小峯輔三・宮川千幹・山西長太郎

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

白石醫學博士
保姆ミ老教師

C幼稚園
中條義雄

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

如山
桃蹊生

與へよ!!小國民に心の糧

いぬはりこ

現代童話の豪華版

裝幀 久保田金億 六六判約四百八十頁插畫數十葉入
口繪 西澤笛 欽上等クローリス背金銀箔入
高島華宵 表紙手摺木版刷ハメ込込

現代童話界の最高峰久留島先生をはじめ左記の童話家三十名の總動員で、その装幀、口繪、插畫と相俟つて、現代童話の豪華版として、誠に其名にふさわしいものであります。

殊に久留島先生の「友垣」は照宮様の御前に進講された模範童話で實に本書の華であります。

執筆 久留島武彦 海老名禮太 池田長坂 野村胡堂 藤野野矢 宗藏 松尾川瀬 小栗吉郎 關屋五十二 長瀬野矢 梅子 小栗吉郎 關屋五十二 長瀬野矢 安倍 幸雄 川崎野矢 小栗吉郎 關屋五十二 長瀬野矢 飯田 幸雄 川崎野矢 小栗吉郎 關屋五十二 長瀬野矢 内山 謙二 近藤 新吉原 英依孝 長藏 松尾川瀬 勝山田 健二 亮武 福文 亮武 福文 亮武 福文

序 同 上澤 謙二 近藤 新吉原 英依孝 長藏 松尾川瀬 勝山田 健二 亮武 福文 亮武 福文 亮武 福文

倉橋惣三編 (新刊)

新體幼稚園唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金七拾錢

目 日本国旗日の丸の旗
倉橋惣三作詞
次 道ぶしん
倉橋惣三作詞
井上武士作曲

いうびんやさん
倉橋惣三作詞
弘田龍太郎作曲
渡し場の船頭さん
倉橋惣三作詞
中山晋平作曲
火消しのなぢさん
倉橋惣三作詞
小林つや江作曲

日本幼稚園協會編 (新刊)

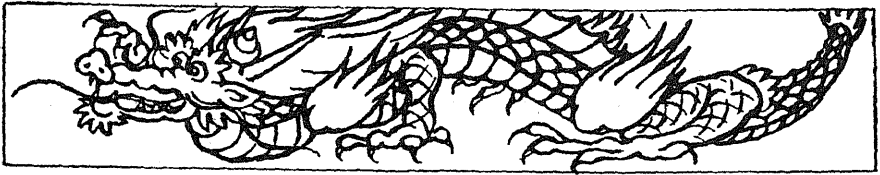
幼稚園新唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金五拾錢

目 めだか
小山村耕よ作詞
次 雨
小松山米子作曲
小松耕輔作曲

ほたる
青山綾子作詞
小松耕輔作曲
ふしん場
小原銀作詞
小松耕輔作曲

〇この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるることを期待してゐる。



第十四卷 幼 兒 の 教 育 第 二 十 號

—(次 目)—

扉

教育者たる幼稚園保姆……………倉橋惣三(一)

兒童研究法講義……………松本金壽(三)

隨筆滿洲の旅みやげ……………武田雪夫(九)

毎日の保育問題……………上澤謙二(三)

十二月の保育……………及川ふみ(一八)

感じたまゝに……………徳久智江子(二〇)

隣組……………土川五郎(三)

フレール賞入選重話……………中野 靜(二五)

雀ミ奴風……………山本フミ子(二六)

お時計ミ虹の子供……………(二六)

幼兒の母……………津田芳雄譯(二六)

ハイデー——ヨハンナ・スピリ原作……………(二六)

國民學校ミ國民幼稚園……………倉橋惣三(哭)

生徒募集

本科生 四十名 研究生 若干名

願書受付三月二十日迄規則書は参銭切手
封入の上申込まれよ。

創立以來廿六年。

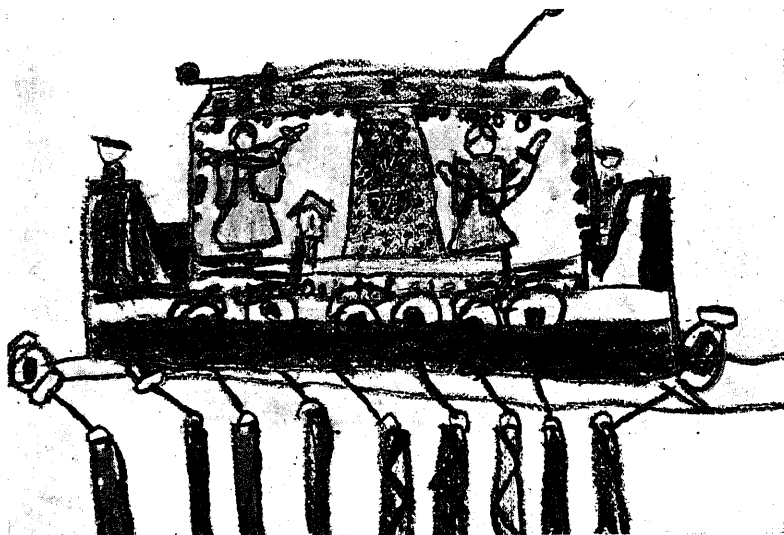
大正五年東京市麴町區に創立。

昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、
附近に森あり、野あり、川ありて四時自
然の恩恵を受け、本校の特色とする自然
觀察、博物採集、圖畫寫生、自然物應用
の手工等材料豊富なり。

玉成保姆養成所

所長 ソファヤ・アラペラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三
省線 西荻窪下車直南約五丁



紀元二千六百年を奉祝する帝都で、一番子どもを喜ばせたもの、長く記憶のこるであらうものは、なんといつても花電車であつたらう。その印象が早速この豪華作である。以て、本年度誌上幼稚園奉祝美術展覧會出品中の壓巻とする。

(倉橋物三)

教育者たる幼稚園保姆

倉 橋 惣 三

幼児保育といふことゝ、幼児教育といふことに就て、寧ろその二つの言葉の使ひ方といつた方がいゝかも知れない問題に就て、前號に述べた。そして、幼児期の特質から、教育が保育性をもつことを言つた。

ところで、眞の問題は、言葉の使ひ方や、機關の別にあらずして、そこで自ら幼児に接してゐる保姆諸君の任務の本質にある。

○
幼稚園保姆は確に幼児の保育者である。學校教師が教育者として教育的作用に専らなるに比して、保育を以てその任とする。すなはち、幼兒身邊の生活保護を行届いた世話に甲斐々々しく働かなければならぬ。假りにも幼兒の現在の實生活と離れて、狹義の精神教育といつたことに止まつてはならぬのである。従つて、自ら行動するところも、況して他から見られるところも、所謂先生らしい先生ではないであらう。幼兒の手の洗ひ方も上手なれば、鼻のかみ方も上手なれば、小用大便の世話も上手に、まめくしい働きに忙しく立働いて寸時の暇もないことであらう。そうであつてこそ、それを厭ふことなくこそ、幼兒の保育に當つてゐるといへる。

しかし、その實際に働いてゐる姿はさうあらうと、その幼兒の爲の本義は教育であつて、たゞの世話ではない。従つて、その人々は、たゞの保育者であるに止まらず、教育者である。

○
こんなことは言ふまでもないことでもある。しかし、從來、社會事業の名に於て行はれた保育事業者の中には、この教育者としての自覺の極めて乏しいものもあつた。今日、厚生事業の名に於て、所謂人的資源の確保の爲として行はるゝ機關の中にも、それが教育でないことを特色とするかのやうな口吻を以て、幼稚園との對立を示す如きものが、往々にして

あつたりする。之れ果して、幼児に對する正しい態度であらうか。

但し、こゝでは、その論に深く入らない。それよりも、所謂保育事業の保姆なるものが、假りにも教育者としての自覺を第二義とするのであつたならば、幼稚園の保姆は、教育者たるの自覺に於て、その特質の發揮につきむべきである。勿論此の意味は、幼稚園の實際を非保育的のものたらしめることではない。決して／＼そうでなく、そうであつてならぬことは、前にも縷言せる通りである。ただそれを盡して、それに止まらず、その實行と共に、その底に教育を自覺しなければならぬことをいふのである。

吾人が、幼稚園を幼児保育の場所として所謂保育所と、本質的に劃然たる區別なからしめんとするは、教育の場所としての幼稚園の第一義本務を稀薄ならしめるものではない。況んや、それを缺如たらしめるものではない。殊に幼稚園保姆を、たゞ之れ幼児の生活保護と生活世話に専らなる、所謂保育所保姆と同視せんとするものではない。

幼稚園は時にその誤れる非保育的教育から、自ら省みて保育的にならなければならぬ。又、保育所は、時にその誤れる教育性乏しき保育から、自ら省みて教育的にならなければならぬ。——が併し、こうした雙方からの合一が實現する迄は、幼稚園保姆の教育者としての自覺は、その絶對の特質でなければならぬのである。

○ 近頃、所謂厚生事業としての保育の必要が、大に世に行はれ、その爲に用ゐられる國家的地方的經費も、大に高く計上せられ、その割合に、幼稚園事業の進展、必ずしも盛ならざるを見る。これは、決して平然と看過していいことではない。しかし、世態斯くの如き觀にあり、眞に幼児教育の意義を理解せざる幼児保育論さへが行はるゝの時に當つて、何よりも先づ大切なことは、幼稚園保姆諸君が、幼児保育に従事する教育者たるの自恃と自重とに強く立つことである。保育の必要と教育の必要と必ずしも一つでなく、又、別でもないとして、必要なることは、これに當る人々の自覺の如何である。

町に、村に、縣に、保育事業の普及と發展さを見て、多少とも、幼稚園の普及と發展さが之れに伴はぬかに見ゆるやうなところがある場合でも、幼稚園保姆は幼児教育者としてのその特質を、大いなる心の誇りを以て發揮すべきである。われ等の意味に於ける保姆とは、どこまでも、幼児教育者たる人々である。

兒童研究法講義 (六)

第四高等學校教授 松 本 金 壽

幼兒の身體動作

一

幼稚園や託兒所に關係してゐられる皆さんにまつては、乳嬰兒や學童よりも幼兒の問題が一番直接的であり又最も關心を持たれるところと思はれますから、これから暫らくの分は出来るだけ詳しく述べてみ度いと思ひます。初めに先づ問題を身體と精神の二つに大別して、身體の問題つまり身體動作の研究法から先に述べてゆくことにします。身體動作の問題は普通運動機能又は運動能力の發達として取扱はれてゐますが、兒童が色々の身體動作が出来るやうになる爲には、その基となつてゐる身體組織の發達が豫定されてゐなければなりません。そこで、兒童の身體發達について誰でも心得て置かなければならない基本的な見方を一

通り述べて置きます。

發達といふ言葉は兒童の爲に作り出されたこと云つてもよいやうに、生後數年間における身心の發達は人生の驚異といふことが出来ます。僅か數ヶ月も離れてゐる見違へる程大きくなつた感ぜられますやうに、躍進又躍進といった趣が此の時代の子供の特色を形作つてゐます。このやうな目覺しい發育は、人間に限らず凡ての生物に共通する現象ですが、萬物の靈長である人間は發育の完了即ち成熟といふ點では一番多くの時間を要するのだといふことを先づ第一に申上げて置ませう。生物學の本なきには次のやうな文句がよく書かれてゐます。

下等なる動物ほど成熟の完了が早く、高等なる動物ほど遅くなる。この點において、アメーバの如きは分裂と同時に親子の別なく、その後新なる成熟を示さず、最も早

く成熟を完了するものであり、人間は他の極端にあつて、成熟の完了には最も長時間を要し、出生時において最も未完成的なる状態である。……

何もアメーバを引つ張り出す必要はありません。私共の身近に居る犬や猫でも鶏でも獨り立ちするまでの期間が極く短いことは誰でも御存じのことと思ひます。或る動物學者が實際に調べたところによります。モルモットは生れてから三日位で充分に獨り立ちが出来るやうになりますし、猫は約一ヶ月で成熟を完了する。云はれてゐます。然し我々の兒童はこんなに簡單には參りません。辛うじて獨りで歩くやうになるだけでも十五ヶ月位かゝらなければなりませんし、自由に歩き廻ることが出来るのは大抵二年後です。それでも體の重心を旨く保つことが難しく、この時代の子供はよく轉びます。片足で立つたり、溝を跳んだり、平均臺を渡る事が出来るのは少くとも五年近くかゝるのが普通とされてゐます。

勿論、兒童の身體發達は五歳で止るものではありません。身長・體重・胸圍・坐高等、身體各部の發達は少年少女期、青年期を経て滿二十歳に初めて頂點に達することが明にされてゐます。(二十歳といふ言葉は此の事實をよく現はしてゐると思ひます。) それですから、私共の子供は一通りの身體動作が出来るやうになるまでに五年、身體の成

熟を完了するまでに二十年といふやうな長い準備期間が必要なわけです。他の動物のやうに精々三日か一ヶ月かかで成熟を終るのでしたら、保育とか教育とかの必要は殆どないわけですが、我々人間の場合には二十年といふやうな長い年月を要するところの中に、保育や教育の重大性が暗示されてゐる。云ひませう。

それならば、この長い成熟の時期を一貫する根本的な方向さか法則的な關係さかは何でせうか。第一に申上げ度いのは上から下への發達といふことです。これは私共の身體各部の發達には一定の順序があり、一番早く成熟を完了する

表 I

	頭の高さ	軀幹の長さ	腕の長さ	脚の長さ
新生兒	1	1	1	1
成人	2	3	4	5

るのは身體の上部即ち頭の方であり、最も遅れるのは身體の下部即ち足の方だといふことを云ひ現はしたものです。生れ立ての赤ちゃんの身長は平均五〇浬ですが、成熟後には男では一六二浬、女では一五〇浬に達し大體三倍になるわけですが、これを身體各部に分けてその割合をさつてみますと、表のやうな規則正しい關係が見られます。上から下への發達といふことが、驚くほどの明瞭さを以て示されてゐるではありません。

んか。私共の身體器官の中で最も大切な大脳なきでも、六歳頃には略々發育を終つてゐますが、軀幹以下は未だこれからと言つた調子であることは、子供は一般に頭でつかちであるといふことや脊が伸びるのは脚が伸びることだといはれてゐること等からも窺ひ知ることが出来ませう。このやうに頭から胸、胸から手足といふ自然の法則の中にも、私共が幼児の身體發達を考察するに當つて、どんな點に著目して助長促進を計つてゆけばよいかといふ大體の見當が示唆されてゐるやうに思はれます。

次に申上げて置き度いことは、出生後における身體の發達といふことは肥大的發育だといふことです。肥大的發育といふのは成形的發育だといふことに對する言葉です。私共の身體を組織してゐる細胞が分裂してその數が増加し、身體各部の新しい構造が出来上る過程を成形的發育と呼んでゐますが、この成形的發育は大體において胎兒の時代に行はれるのでして、生れてからの發育は細胞が肥大して目方や容積が増える肥大的發育が主になります。それですから、榮養とか、鍛鍊の仕方といふやうな後天的な影響が身體發達の重要な役目を果すことになることを考へることが出来ます。つまり身體發達の基となる素質は、既に人生の出發點において動かすべからざるものとして定められてゐるわけで、これをどう發達させるかについての残された唯一つ

の道は環境の力による助成促進の仕方、即ち保育や教育の如何に待つだけだといふことになります。子供により又環境によつて、身體發達の程度には色々の違ひ即ち個人差が出来ることには明かな事實ですが、それにも係らず、發育の方向には個人差を超えた一定の順序段階があつて、決して順序の飛び越しや段階の飛躍が見られないといふことも、肥大的發育だといふことに主な原因を求めることが出来ると思ひます。

二

上に述べたことは身體そのものゝ發達についての基本的な見方に過ぎませんが、今度は視點を換へて身體動作の發達を調べる研究法に移りませう。身體動作の發達は全身の運動と手腕の運動とに大別できますが、その前に表情運動について一言して置きます。

表情運動といふは、内臟諸器官や身振の變化等を含めた全身の運動を指すわけですが、代表的なものは顔付の變化です。「顔色が悪い」「顔色を讀む」といふ言葉がありますやうに、相手の表情を判断するといふことは、私共大人の日常生活でも屢々行はれてゐることですが、未だ言葉を話さない赤ちゃんや言葉で充分な意志表示のできない幼児に對しては、表情を通じて心の中を窺ふことが一層大切になつてきます。母親の本能は、泣き聲で空腹・排便・腹痛等に

よる原因の違いを直覺するに云はれてゐますが、このやうな注意深い觀察眼を養ふことは幼兒の保育者にまつても同様に必要ではないでせうか。殊に幼兒は大人と違つて天真爛漫そのものですから、表情は文字通り心の鏡と云ふことが出来ます。喜びや悲しみだけでなく、興味を持つてゐるか、倦きてきてゐるか、元氣があるか、元氣がないか等、大抵の場合は表情の變化で大體の見當をつけることが出来ます。それですから、保育者にまつて表情の研究といふことは決して忽に出來ぬ問題の一つだと思はれます。これまで此の方面のことは、さかく閑却されてきてゐたやうですから、一言つけ加へて置いた次第ですが、近頃では表情の判斷も映畫を利用して、表情の全経過や細い内容の分析なきゝいふやうな精確な研究方法も行はれるやうになり、喜びや悲しみと云つた漠然とした方向だけではなく、何を喜んでゐるか、何で悲しんでゐるか等と云つたやうな細かな色合ひの違ひや、顔全體の變化と眼や口の變化なごの關係等も明かにされるやうになりましたから、單なる觀察よりも、一歩進んだ研究が可能となつてきたわけです。映畫教育の問題と竝んで新しい注意を喚起し度いと思つてゐます。

表情運動も全身運動の一つですが、表情の變化は意識的といふよりは無意識的です。歩くとか、走るとか、跳ぶとか

かといふやうな全身を動かす動作とは、この點で性質が違つてゐます。

歩くことが出来るといふことは、動作の發達にまつてばかりでなく、知識の獲得の上からも、生命の維持といふ點からも、非常に大切な意味を持つてゐるものであることは云ふまでもありません。歩くこと、つまり全身の移動を行ふといふことは、動物と植物とを境界づける大きな差別點でせう。走るとか、跳ぶとか、攀ち上るとか、泳ぐとか、色々な全身運動は皆歩くことから分化發達してきたものと云ふことが出来ます。そんなわけで、一歳三ヶ月頃から始まる歩行運動については色々な問題が研究されてゐます。一步の長さや速さとか、左右兩足の歩幅や歩角等が、年齢の増加と共にさう變化するか、といふやうな問題を映畫にまつたり、粉で足跡を記録したり等して研究が進められてゐますが、幼兒の問題としては、寧ろ階段の昇降とか平均臺渡りとかのやうな技巧的な方面、及び歩行距離とか走力や跳力とかのやうな歩行能力の方面が重要視されなければならぬところでせう。前に述べた上から下への發達の下に云ふのは、主として脚の問題です。脚を中心とした身體下部の發達によつて、體の重心が頭から軀幹に移ると共に、骨格の發達によつて姿勢が整ひ、身體の安定度が高まつてくるのは幼兒時代の大きな特色であるばかりでなく、元

來、子供は風の子云はれますやうに、絶えず動き廻ることを好みます。體操・遊戯・遠足等を通して、この自然の傾向を自由に伸し、技巧的な方面や歩行能力を最大限にまで高めてやることは極めて適切な處置云ふことが出来るでせう。

三

歩くことが動物と植物との境界線であるとするならば、手腕の運動殊に手技の發達は人間と動物とを區別する分水嶺の一つだ云ふことが出来ます。しかも、この手技の發達も基礎的な方面は凡て幼児時代に培はれるものだ云ふことは、幼児が物を擱んだり、箸を持つたり、ボタンをかけたたりする日常生活を通じてでも、或は又、鉛筆やクレヨンを持つたり、積木を重ねたり、折紙を折つたりする圖畫や手工の時間を通じてでも、明かに窺ひ知ることが出来るでせう。私はこれを力・速さ・確かさの三方面に分けて、研究法の概略を述べてみ度いと思ひます。

力云つても、物を押ししたり引つ張つたりする力や持ち上げる力等、色々な方面がありますが、手にぎの位の力があるか云ふことを見る簡単な方法は、小兒用の握力計で握る力を計ることだと思ひます。この機械は握る力が尙單位で現はれるやうな目盛がついてゐますから、誰にでも使用が出来ます。これで左右兩手の握力を比較することも出

來ますし、又同年齡のもの同志の個人差や年齡の違いに應ずる發達度も調べることが出来ます。そして更に大人の握力と比較したならば、幼児の力がどの位のものか云ふことを數字的にも明かにすることが出来、色々の重さのものを與へる場合の參考にもなりません。耐久力を見る爲にはエルゴグラフ云いふやうな機械もありますが、幼兒には不向きでせう。近頃體力檢定に用ひられてゐる懸垂運動の方が、この點ではより適當でせうが、これは細かな違ひを見出すことが困難です。又綱引きや棒押し等では相互の力の比較は出来ても、どの位か云ふ分量を出すわけには参りません。力の大小は腕力によつて代表されてゐるやうに、手の力の發達は色々の動作の發達に直接間接に必要なものですから、單に計るばかりでなく、伸ばす方法も考へられなければならぬと思ひます。

動作の發達に對して力の強さよりも一層大切な條件とされてゐるのは、速さと確かさの進歩でせう。敏捷さいふ言葉がこのことをよく云ひ現はしてゐます。そして、子供の動作の研究云へば、すぐに速さと確かさが聯想されるやうに、この二つの問題は玩具や教具にも取入れられてゐますし、又皆さんも色々工夫もされ實踐もされてゐることと思ひます。私共の方では速さの研究には、打叩きか棒挿さかカードの分類等、確かさの研究には細い線と緑色の

間を辿らせるか、標的を狙はせるか等のことを行はせる爲に、打叩度數計・棒插盤・カード分類装置・迫路盤・狙準動作検査器等を用ひてゐます。斯う書き立てるゝ如何にも嚴しいやうですが、實物は至極簡單なもので、誰でも氣附かれるやうな性質のものばかりです。器械の證明は省略して、検査に用ひられる時間制限法を作業制限法の區別を述べて置きませう。時間制限法といふのは、三分間とか五分間とか、幼児に適當した検査時間を定め、その時間内における分間を仕事の量を比較する方法です。又作業制限法といふのは、その反對に、一定の仕事を終まで行はせ、それに要した時間を比較したり、誤りの數を比較したりする方法です。速さの方の研究には時間制限法が好都合ですが、確かさの方の研究には作業制限法が主になります。

速さや確かさの問題は、右利き左利の問題や器用さの問題等と關聯して、研究法にも色々複雑な變化が考へられますが、幼児を對象とした本稿では極く簡單な問題だけに止めて置きます。私自身が幼稚園児に行つた實驗の經驗から云ひますと、速さの方は比較的に年齢の低い方に大きな開きが認められますが、確かさの方になるゝ年齢の高い方に移つてきてゐます。速さや確かさの發達の順序を示す一つの問題と思はれますので、附け加へて置きます。モンテッソーリの恩物等で比較なさるやうお勧め致します。

直接購讀のお願い

○本誌の御購讀の方々の中、取次書店を経て居られる方々に對し、その御高誼を謝してゐますが、爾後は單なる購讀者としてゞなく、本會々員として登録申上げ、會員としての御親しみを御便宜を加へ度く存じますので、相成るべくは直接御入會のことに願ひ度いと思ひます。お早き御申込みをお待ちいたします。

○新年號よりは、本誌もいよく標準規格版になることになりました。合冊製本の御都合もお有りか存じ申し上げますが、右規格版は、従來の誌面と比べ、幅に於て一分、天地に於て五分程の縮小になります。その他一頁内の字數とか、紙質などは來年度も略々今までと變りありません。

○光輝ある二千六百年、多事多難のこの二千六百年も暮れやうとしています。來る年も、皆様の良き雜誌であり度い希望にはおられません。何卒、御援助も御叱責も舊に倍して頂戴致し度い誌上をかりて御願申上げます。では皆様御機嫌よう御越年遊ばしませ。

昭和十五年十二月

日本幼稚園協會

滿洲の旅みやげ

—その二—

武田雪夫

一、奉天にて

奉天へ行くに、商工業の盛んな有様を見て、すぐに私は、日本の大阪を聯想しました。

今は、滿洲國の交通網の結節點として、極めて重要なところになつてゐて、人口七十萬（内に日本人十萬餘を含む）を誇る奉天は、古く渤海の昔から、元、明、清の諸代、瀋州、瀋陽、盛京と呼ばれて、繁榮した都市であることは、今更に申上げる迄もないで存じます。

昔、清の太祖及太宗の居られた宮殿は、今も大西門内に残つてゐます。そこに奉天市ミ省ミの教育會が、事務所を設けてゐました。

私は、そこで、滿洲人の國民學校教師百數十名に、教育、童話、紙芝居等についての問題を講演する好機を得たのでありますが、また他の場所で、日本人の小學校の教師の人たちに話することも出来て共にうれしかつたことを記したいと思います。

この奉天では、私は、北陵へ行きました。

こゝは、清朝第二代太宗文皇帝の陵墓であります。私は、こゝへ案内されて、一步その境域内に入るに、私は、ふと妙な錯覺に陥つたのでした。

——滿洲國內を歩いてゐるた身が、いきなり、ぱツミ日本に來たやうな思ひがしたのです。

それは、參道の石疊の兩側に、太い松の木が、何本も何本も、枝をひろげてゐたからでもありませんが、それよりも、その松の梢で奏でられてゐる靜かな松籟の音からでもありません。

念のために申し上げます、滿洲には、實に松の木が少いのであります。しかも、私の見た限では、あるにしても、それは黒松ばかりでありました。なほ、日本と異つてゐる點は、松を決して芽出たい木としないことでありました。むしろ反つて不吉な木として、墓地又は、それに類した場所にしか植つてゐないのであります。

大體に於て珍らしい松を、そこで思ひがけなく澤山に目にし、その上、日本獨自のものやうに考へてゐるた松籟の靜かな音を耳にして、私が突如として、「日本」を感じ、身の日本に在る思ひがしたのは、極めて自然の、無理のないことでありました。

特にこの奉天で、他と變つた、珍らしいところとして、同善堂を擧げたいと思ひます。

この同善堂は、今から六十年程前に、左中莊公の設立に係るもので、貧民、醫務、孤苦、工藝の四部に分たれ、相當に整備された方法によつて經營されてゐる社會救濟事業であります。

特に、私生兒の捨子を受取る救生所、娼婦の遁入したのを收容する濟良所、乞食を收容する棲流所等は、珍らしい施設でありました。

その中で救生所は、兩側とも塀の、さびしい通の片側の塀の一部が、少し凹んでゐて、そこに大人の眼程の高さに、救生門と横書にした文字のある穴が開いてゐるのです。

そこへ子供を捨てるさ、その重みで底板が下り、それと同時に電氣のスイッチが入つて、大きな電鈴が鳴出す仕掛になつてゐるのであります。

可愛い赤ん坊を捨てるさいふのは、しかも私生兒であるから、よくよくのこさであるし、それは相當に嚴肅なものであらうと私は思つてをりました。

ところが、遊覽自動車で見に行きますと、ぐるりと遠い門の方から廻つて、そここの塀の内部へお客をぞろぞろと引つぱりこんだ女案内人は、いきなり、

「……ここが、先程、外の方からご覧になりました救生門でございます。ここへ赤子を捨てますと、その電鈴が……」
と言つたやうなことを言ひながら、その底板を片手でおさへて、電鈴を、けたたましく鳴らしました。

私は、思はずヒヤリしました。何だか今まで自分の心の中に持つてゐた嚴肅なものを、全く打ちこはされたやうな氣がしたのであります。

二、大連にて

地理的には、場所が、前後して、申わけありませんが、今度は、少しく大連のことを記したいと思ひます。

この滿洲國の表玄關とも言ふべき、大連の町は、まことに美しい、靜かな、しかし活氣に満ちた町でありました。何よりも忘れられないのは、ある朝、放送局の車で、局へ放送に出かける時、ご案内下さる婦人の方が、氣をきかせて通つて下さつた遊覽道路でありました。

中央公園の奥の忠靈塔のうしろを大きくまはつて、山の中腹をぬつて上り、一番高いところから見下した大連の町の美しさは、全く、うらやましいやうに思つた程でした。市内の遊覽バスも、この道路を通るやうでありましたが、そこからは町の大半が見下せて、實に大きな眺めでありました。

大連の驛は、割合に目立たぬ場所に、低く、つつましかに、しかし近代的の美しさを誇つて、きつしりま坐つてゐました。私は何か、かう、おさなしい美しい娘さんでも見たやうに、非常な好意が持つたのでした。

よく清掃された、タール・マカダムの道路に、アカシヤの街路樹が、何とも言へぬ美しく印象的でありました。それにも増して、美しく感じたのは、この大連でお目にかゝつた、關東州保育會の方々のお心でありました。

私は、たつた四日程しか、大連に滞在しなかつたが、その間に、同會の主なる方々に二度もお目にかゝれたのは、今から思出しても、全く幸のことであります。

はじめでは、放送局の主催にかゝる、幼児童話の座談會の席であり、二回目は、特に同會の方々が、ある場所で、私のために設けて下さつた席でありました。

種々、保育や幼児童話の問題に就いて語つたのですが、特に私は次のやうなことをその節お話ししたことを忘れずに記したいと思ひます。

それは、仕ごの上で、私はいつでも、その時その時として出来るだけ精一ぱい、出来る限りの努力をしてみます。だから、他の方のなさつたごきで、もし何か充分でないごきがあつても、決して、ごめたり、輕蔑したりするごきは私はいないので。他の方も、私同様に、力一ぱいになさつていらつしやるものご考へ、そんなに精一ぱいになさつていらつしやるのに、仕事として、萬一不充分のごきであつたら、これだけしかお出来にならないのは、餘程そのごきが、困難なごきであらうご考へるのであります。そして、むしろ、それだけでも成績を擧げてをられるのは、充分の努力があればこそであるごき、善意に解釋するごきでなくてはならぬご思ひます。およそ、そんな話でありました。

さて、この稿を記すに當り、關東州保育會のために、特に一層のご發展を、はるかに祈りたいご思ひます。なほ特に東京女高師のご出身ご承つた、同會長の小山田節子、並に石田豐子兩女史のご健闘をのぞみます。

又、大連驛まで、可愛いお嬢さまご同道で、お見送り下さつた小山田女史のご厚情に對し、この尊い誌面をかりて、お禮申上げたいご存じます。

なほ、私は奉天から、熱河の承德に出て、次いで古北口を経て北京に入り、北支、蒙疆へご、私の大陸の旅は、三ヶ月に亘つて續けられたのであります。その印象記は、またの折に申上げることとして、今は一先づこのペンを擱きたいご思ひます。

多田房之輔先生を悼む

多田房之輔先生は我が國幼稚園の長老として、又池袋幼稚園長として長い間我が國の幼稚園界を指導せられてお出ででしたが、十一月十八日長逝せられました。本會は謹んで哀悼の意を表します。

日本幼稚園協會

毎日の保育問題 (三)

上

澤

謙

一

五 どこにお辨當を忘れたか

入口でのごた／＼は、波のひくやうにひいて、園児たちはみな歸つてしまつた。建物の中は急にひつそりして、同時に先生達も何ごなくホツミする。

途端にひさりの子供がかけ込んできた。小さい組の女の子Mちゃんである。緊張した顔さいふよりも、こらえにこらえた顔である。何をこらえたかさいへば、申すまでもない、泣くのをこらえたのである。さうして一生懸命走つて戻つてきたのである。

入口にちやうき先生が二人立つてゐた。

『Mちゃん、さうしたの』と、殆ど同時に聲をかけた。

『お辨當箱……忘れたの……』とさいふ。

『お辨當箱? お辨當箱なんかなかつたわよ』と、一人の先生がさいふ。さうして『誰かが間違つて持つていつたんでせ

う』と、いひ添へる。

するさもう一人の先生がさいふ。

『まあ、Mちゃんひさりでお辨當箱取りに歸つてきたの。えらいわねえ』

さうするさ、

Mちゃんの顔の切迫した緊張はやや緩んでコツクリする。

『待つてよ、いま、先生がさがしてきてあげるからね』

と、言葉をつづける。

さてこの二人の言葉を比較して見る。

前の先生がいつたこゝは、理屈に合つてゐる。さつきみんなの歸りがけに、いつものやうにお辨當を置く棚を見た時、一つも残つてゐなかつたのである。だから忘れたこゝは思はれぬ。それなら誰か前の人を持つていつたこゝは断定するより外にない。然し園児の中には故意に悪意を構へて持つ

てゆく者はなからう。さういふれば間違つて持つていつた
と断定するより外にない。正にこの言葉は理窟に合つてゐ
るのである。

けれども理窟に合つてゐるだけそれだけ、何ぞ冷かであ
るこゝよ。『お辨當箱?』さういふ劈頭の言葉がもう反問的
である。反問的さういふ底には「なぜそんなことを聞くの、お
辨當箱はめい／＼持つてゆく筈ではないの」さう咎める氣持
がある。つづく第二語『お辨當箱なんかなかつたわよ』さう
いふのは、明かに決定的な言葉である。その裏にはキメツケ
ル氣持がある。先生は咎めたりキメツケたりするつもりで
いふのではないが、さういふ氣持が潜んでゐるので、自然
に言葉の音や調子にそれが含まれる。その氣持は言葉と共に、
子供の心にぶつかると。「こらえにこらえて、一生懸命
になつて戻つてきたをさな兒」に取つて、それがいかにき
つい、きびしい、いかついものであるかはいふまでもない。

つづく第三語『誰かが間違つて持つていつたんでせう』
は、致命的な言葉である。これでブツリ頼みの綱は切れ
てしまふ。何となれば、「こらえてひきり再び幼稚園まで
戻つて來させたもの」は、そこに忘れたものがあるにちが
ひないさういふ期待だからである。然も『誰か持つていつた
んでせう』と、權威ある先生がいふに至つては、期待は粉
碎されざるを得ないからである。この言葉は、かくて、先

生がさう思つていはなくても、結果に於ては明かに「相手
を突放す」すげない言葉になるのである。

かくてMちゃんの忍耐も、努力も、希望も悉く消える、
ワーツミ泣き出すのが必然の経過であらねばならぬ。

こゝろが泣かなかつた。泣かないばかりでなく、ジツミ
入口に立つてゐる。なぜか?

全くもう一人の先生のためである。後の先生は何よりも
先づ、こらえてひきりで戻つてきた本人の可憐な努力を
見、その精神的價値を見た。だから第一語はこれに對する
認識と稱讃とを表はしたものである。これで子供の心は先
づ一種の満足と、さうして強い獎勵を與へられる。第二語
の『先生がさがしてきてあげるからね』は「あるにちがひな
い」さう思つて來た期待に、大きな望みを加へる。權威ある先
生が、期待を受取つて、それを實行に移してくれるからで
ある。だから、ジツミ立つて、入口に待つてゐられるので
ある。

後の先生も、前の先生と同じく、さつきお辨當箱を見て、
一つも残つてゐないことを知つてゐるのである。けれども
この先生の口からは、所謂理窟に合つた言葉は出なかつた
のである。なぜか? この先生は「物の有無さういふ形式を見
るよりも「可憐な努力と期待」さういふ心を見たからである。
だから形式に副つた理窟に合つた言葉で應酬するに堪へな

かつたのである。もしさうしたら、その努力を期待は全く無になる。否、その努力を期待のためにかへつて悲しみまで失望を大きくするやうな逆な結果になるだらう。それに堪へられなかつたのである。それで自然にさがしてやる氣になつたのである、子供の心に直下に同情同感して立上がつた先生のその時の心持は「さうせないけさ一應さがして見てやらう」「さういふやうな、氣休め的な政略的なものではない。もつと強い熱のあるものである。」

「さういふ心持である。」

それでお臺所、お部屋、遊戯室を見て廻つたが——ない。先生はがつかりした。がつかりしたさいふよりも子供の心を想つて痛はしかつた。けれども仕方がない。再び入口へ来て「ね、さうしたんでせう、さういふ……さういひ出した時である。」

ふさわきを見た子供は、俄に大聲を掲げた。

『あつ、先生、ここにあつた!』

それは下駄箱の中である。Mちゃん履物を入れる小さな區劃の中である。そこにあのバスケットが黙然としてゐたのである。

『まあ』『まあ』

二人の先生は殆ど同時にいつた。さうして思はず笑つ

た。それは見つけ出したのを喜ぶ笑ひでもあり、事柄が餘りにだしぬけで、又餘りに身近だつたので、滑稽感を催した笑ひでもあつた。

Mちゃんはニコ／＼して、バスケットを取つた。

『そんなところにあつたぢやないの』『さ、前の先生がいふ。』

『まあ、あつてよかつたわね』『さ、後の先生がいふ。』

ここで又二人の言葉を比較して見る。

前者の言葉の奥には非難の氣持がただよび、後者の言葉の裏には喜ぶ氣持がみなぎる。彼は離れて現はれた形式を見、これは即して心の中を見る。

子供はバスケットをプラン／＼させて、いそ／＼と歸つてゆく。

六 イージゴインケの臆病者

五、六人の男の子が棒きれを持出した。

『僕、大將だよ』『僕、部隊長』『僕は曹長だ』

めい／＼自分で任命した自分の役名を披露する。

『これ、日本刀』『これは鐵砲』『これは機關銃』

一本の棒きれは、いろ／＼な武器になる。將に戦ひごつこが始まらうとする。

その時である。先生の顔が窓から出て、聲がかかつた。

『ちよつと! そんなものを持つてふり廻してはあぶないでせう。ほら、いつか棒を持つて遊んで、たくさんお友だ』

ちが泣いたでせう。それはやめるの、ほかのものでなさい』先生の頭の中には、しばらく前の或る時のことが思ひ出されてゐた。

それは園の庭へ植木屋がはいつて、木の枝をおろした時のことである。その枝をめいめいが持出してふり廻して、全庭が喧噪、混亂、號泣の巷々化した。それで先生はみんなにそれを持つのを禁じたことがある。それ以來、何さなく「棒きれを持つてはあぶない、やめさせなければならぬ」さういふ觀念が、規則のやうに頭の中にたたみ込まれたのである。それで、今、その時と同じやうな有様を見るに、その「規則」が出てきたわけなのである。

聲をかけられた五六人は顔を見合はせた。しばらくそのままであるが、やがて一人が『やめよう』さういって、棒きれを捨てるに、みなそれに倣つた。

『ああ、さうく、よく分かつたわね』と、先生がいつた。けれども子供達は、そのままその遊びをやめてしまふのは、いかにも心残りだったのであらう。まつきの一人が、右手を出していつた。

『これでいいよ、これで戦は』

その手は固く握られて、人さし指が出来るだけ長く伸ばされてゐた。その指を棒の代りにしようさういふのである。

それを見た先生はハツミした。

「ああ、それ程棒がほしいのか。いかにも武器のない戦争はない以上、何か持つものがない戦争ごつこはあり得ないだらう。棒きれを持たずに戦ごつこをせよさういふのは、武器を持たずに戦へさういふのを選ぶごつこがないさういへう。そんな必要な棒でも、先生にさめられれば、思ひきつて捨てるのである。それ程までに、先生のいひつけに服従してくれるのか。けれども必要な欲求はやむべくもない。その服従ごつその欲求を調和するために、自分の指を代りに使ふさういふごつこまで考へ出したのか。そのいじらしい心根はさうだ」

その椅子に腰をおろした先生は、尙も考へた。

「恐ろしいのは、活きた生活を固定した規則で律しようさういふ心である。殊に自由潑刺たるべき幼児の生活にそれを課する心である。然も人はさもすれば規則にたよる。最もはつきりしてゐて、従て最も簡單だからである。殊に團體生活を處理する時、それに泥み易い。けれども國民大衆を率ゐる場合ならいざ知らず、をさな兒を保育するのに、規則を先に立てるごつこは、うっかりするに、生けるものを殺すごつこになる。『棒はやめよう』さういつた或る場合の處置を規則化して、あらゆる場合をそれで束縛しようさういふ恐ろしい態度に、いつか知らず、自分はなつてゐたのではないか」

考へは尙つづく。

「さうだ、戦争ごっこに棒きれを持たせよ。さめるのは、その棒が「ごっこ」以上の又は以外の危険な目的に用ゐられる場合に、なさるべきではないか。それで決して遅くないではないか。規則主義者は頑固屋だ、イージーゴーイングの徒だ、臆病者だ」

ワーツミいふ聲が窓の外に起つた。見るまゝ、さつきの五六人が追ひつ追はれつしてゐるのである。そこで取つてきたか、手に手に細い／＼短かい／＼小枝を持つてゐる。やはり指では満足できなかったのだ。けれども先生にさめられたことはまだ忘れられない。それでつつしみ深くも梢の小枝の端くれにしたのである。

「何さいふいじらしさ。御身等は、こんな不合理な禁令を出す私に、こんなに従ふ心を持つてゐるのか、濟まない、濟まない」

先生はその子供達一人々に詫びたいやうな、殊にあのこれでもいいよ、これで戦はうよ、指を出した子供に對しては、その前へ出てあやまりたいやうな氣持になつた。

それは午前の外遊びのこゝであつたが、午後の外遊びの時に、又ワーツワーツミいふ叫びが起つた。

「やり出したな」こ思つた先生が、外を見るまゝ、手に手にあの「やめて」さいはれた棒きれを持つてゐる。到底細い短

かい枝では満足できなかった彼等は、遂に——さいふよりは、自然に棒きれまで發展しなければやまなかつたのである。同時に自然に禁令は忘れられたのである。同時に又彼等は我を忘れたのである。さうして全心全身を傾けて、戦ごっこに没入してゐるのである。あの赤い顔を見よ、輝く目を見よ、動く手足を見よ。

先生はホツミ溜息をついた。胸をふさいでゐたかたまりが取れ、肩にのしかかつてゐた重石がおりたやうな氣持である。

ふぎ、何年前かに觀た映畫『制服の處女』の最後の場面が目の前に浮かんできた。規則づくめで固まつた女學校長のおばあさんが、若い生命の躍動を支えきれないで、精神的に敗北し、うな垂れた顔に手を當てて、足取り重く、自分の部屋に歸つてゆくまゝである。

「あのおばあさん校長だつて、規則づくめのかたまりにならうこしてなつたのではない。知らず識らずのうちにさうなつてしまつたのだ。だから、自分がさうなつたこゝに氣づかないのだ。他人事ではない、うつかりしてゐるまゝ、それは自分のこゝこになるのだ」

先生は目を閉じた。我まわが衷を見廻すやうに。ワーツミ子供達の朗かな喊聲が、その窓邊を掠めて過ぎた。

二十二月の保育

及川ふみ

この月に入つてからも暖い日もあつて外遊びによい時もあるが、大體としては屋内保育の多い季節になつて來た。自由遊びの様々も考へなければならぬ。集團の遊びに或は個人個人の遊びなきかぞへあげてみるに、毬つき、風船つき、羽子つき、繩遊び、飛行機飛し、輪なげなきは幼児たちの興味もつきないし、又身體の全身のよい運動でもある。又繪カルタ、双六、なきも簡単な方法ですることよく大勢の幼児たちが同時に遊ぶ事が出来る。又お正月、クリスマスなきを控へて、この月に入ればすぐにその支度にさりかゝらねばならない。

第一週 十二月二日——七日

唱歌遊戯 お正月
双六つくり

新聞紙全紙大を臺紙として、一つづゝの畫の大きさは畫用紙十六切大にする。十二三枚の畫をかいて貼り上

げるのであるから學期の終りまでに出來上らせる様に一枚一枚丁寧に畫かせる。年少組であるから畫柄は簡單なものを選ばなければならぬ。例へば一枚に象を二三匹かゝせ、次の一枚には兎を數匹、次の一枚にはヒヨコばかり、次の一枚には蝶々のみさいふ様に双六に貼り合せによい様にして一度に一枚づゝ畫かせる。年長組でもあれば、動物双六、花双六、乗物双六、お菓子双六なきも同種類の様々のものを畫くのも面白いことであるが、年少組ではまだく畫柄の種類が豊富でないからいろくのものゝ交ぜ合せで作る。かりにウサギ、チユールツプ、キシヤ、ヒヨコ、ヘイタイサン、ヒカウキ、テフテフ、オジヨウサン、ジドウシヤ、カメ、ダルマサン、コツキなきの幼児に畫けそうな畫材をきめておくのも豊富に材料を考へ出されぬものにはよいかもしれない。臺紙は包裝紙をつぎ合せて新聞の全紙大にして貼るのであるが一枚づつの畫の周圍を赤、黄、綠、茶色なき縁りにするに輪廓がはつきりしてよい。大體の双六の計畫を話し、或は具體的に今までの幼児の自由畫を集めて作つておいたものなきを見せるに、幼児たちの双六に對する興味を誘導する事にもなる。

火

ヌリエ ヒカウキ

新聞紙むしり(紙粘土でサイコロを作るため)

水

お話 鼠さんのお引越し(フレーベル賞入選童話)

双六の繪

木

唱歌遊戯 お正月

新聞紙むしり

金

お話 觀察 はなし 霜

双六の繪

土

紙粘土 サイコロ作り

第二週 十二月九日—十四日

月

唱歌遊戯 凧

双六の繪

火

お話 逃げない小鳥(フレーベル賞入選童話)

サイコロの色塗り

水

双六の繪

木

唱歌遊戯 凧

金

(ヌリエ ダルマ

お話

双六の繪

土

紙粘土 ダルマ作り

第三週 十二月十六日—二十一日

月

唱歌遊戯

サイコロの數書き

火

お話

双六の繪

水

ダルマの色塗り

木

唱歌遊戯

双六つくり

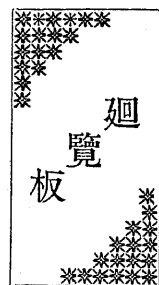
金

お話 皇太子様御誕辰

双六つくり

土

保育終了式の集り



隣組

土

川

五

郎

隣組の振付について

あのリズムミメロヂーの流れが幼児の心をそよる事の最もつよい爲めに幼児は最も悦んで歌ふ。此點は幼児に最も考へねばならぬ重要性の存する所である。併も年長の兒童も大人も併せて喜ぶ長所を持ち品よく通俗的な特點がある。彼の隣組が新體制の根源をなすこれは一家族隣組の人達が老いも幼きも共に共に和協一致の感情が湧き起る所に大なる獲物があるものゝ確信する。

以上の點から振は歌詞によらずにリズムミ運動より起る快感ミ體意向向上を目指して拙き振り付けをなしたるが故に一、二、三、四共に同じ動きにて十分であるを考へ一つの振りにて全部に通ぜしむる事が簡易であるを思へり。

ビクター盤の隣組で行ふ時は幼兒を中心に兒童を外に圓を作り第一第二第三番迄は幼兒がつまり三回行ひて後兒童が四回行ふて盤が終る様に使用する事も出来る。

或は年長が年少の振りを前奏間奏に使用するも又變化あつて宜敷かるべし。

こなりぐみ

年少組

前奏は全員が丸くなり手を繋ぎて足踏をする。

トントントンカラリト……丸くなり手をつなぎたる全員は前へ四歩出る。

トナリゲミ……手を離し體を前かがみにして拍手三回後退する。

カウシヲ……再び手をつなぎ左足を左へ一歩運び「シヲ」にて右足を左足に揃へる。

○熟したる上は「シヲ」右足を左足の後ろへ送りつま先にて床を打つもよし

アケレバ……右足を右へ一歩「レバ」左足を右足に揃へる

カホナジミ……「カウシチアケレバ」を同じごとを繰返す。
マハシテチャウダイ……又手をつなぎたるまゝ前の如く前
進す。

カイランパン……三回拍手して後退す

シ……大きく拍手一回左右相對す

ラーセ……二人で兩手を取り合ひ上體を少しく前かがみに

頭を左に傾けて親しみある様に見合ふ。

ラレタリ……頭を右に傾けて見合ふ

シラセタ……前の「ラーセ」を同じく繰返す

リ……「ラレタリ」を同じくす

○熟したる上は最後の「シラセタ」の時全員が反對に向き

相手をかへて見合はするもよし

○第二、三、四の歌は同じ運動を爲す

年長組

年長より小學兒童も老ひも若きも打よりてなす

トントン……左足を左へ一步送り右足を左足の前へ軽く出

す此の時兩手を左上に振り上げて拍手一回、顔は左上に

向く

トンカラリト……右足右へ一步左足を其前に出し兩手を右

上に振り上げ拍手一回

トナリゲミ……右向きなり前かがみて兩腕を交互にふりつ

つ躰足三步にて止まる

カウシラ……左足一步前にすり出す時掌を下にしたる兩手

を胸前より左右に少しく開く胸は斜左前に向く

アケレバ……右足一步前に兩手を同じく左右に開く

カホナジ……左足一步前に右腕を曲げ掌を左に向けて前膊

を立て左手は掌下にして左方に伸ばし顔は左に向く

ミ……右足一步前に左腕を曲げ掌を右に向けて前膊を立て

右手は掌下にして右方に伸ばし顔は右に向く

マハ……一回拍手

シテ……下より打ちあげる様に一回拍手すぐに掌を胸の方

に向けて軽く握る、同時に左膝を持ち上げる

チャウダイ……左足を伸ばして足先きを前につける時兩拳

を掌を上にして兩手をやゝ左下に伸ばして開く(物を打

つちやる様に出す)

カイ……一回拍手

ラン……一回軽く打ちあげ掌を胸の方に向けて握る。同時

に右膝を持ち上げる

パン……右足を伸ばし右斜前につま先きを床につけ兩拳を

掌上にして兩手をやゝ右下に投げ出す様に兩手を開く

シ……強く短く拍手一回

ラーセ……胸を右に向け左肩を前に左足を一步大きく出す

時左手前(掌下)に右手後ろに伸ばし右足のつまさきにて

床を打つ(左足の後方にて)

ラレタリ：…前と同じ要領にて胸を左に向け右肩を前に右足を大きく出す時右手前左手後ろにし左つまさきにて床を打つ（右足の後方にて）
 シラセタリ：…前の如く二回左右を繰返す

トントン：…右足を左足に振り上げ左足にて跳ぶ
 トンカラリト：…同じく右足にて跳ぶ
 ラーセ：…右足を後ろに流し左足にて跳ぶ
 ラレタリ：…左足を後ろに流し右足にて跳ぶ

以上は前記の如くして熟したる後跳躍を入れるもよし
 ○第二、第三、第四の歌は第一を以て行ふ。

感じたまゝに

東京市麴町區番町幼稚園 徳久智江子

來年度から 非常な抱負を期待して出發されます國民學校に於ては、羨ましい事がかなり重要視されて居ります。幼稚園での躰は從來から日常保育の中に織込まれて居りましたが、國民學校への基礎を作る所として、此の際一層の研究を必要とすると思ひます。

躰：…生活訓練：…細かい事は手を洗ふ事から靴のぬぎ方等數へて行きます、實に限りが無い程澤山あります。然し

なぜそうさせるのか……
 よい子供にする爲に……
 ではさういふ子供にしたいのか……
 ご考へて見ます、自然何か大きな目的の様なものがあるのではないのでせうか。
 或日フトこんな事を考へて、自分は一體どんな子供にしようとして居るのか、自問自答して思ひついたらまゝに順序もなくノートして見ました。

(一) 潑刺した健康の子供に。

これは誰もが先づ考へる事だ。次の時代を背負つて行く子供達まづ健康でなくて何の御用に立てませう。

御飯をゆつくり食べる事も、含嗽をさせる事も主目的は體の爲の訓練だ。

今の幼稚園は、比較のお部屋の中に居る事が多いと思はれますが、もつこく青天井の下で行へる事が澤山あるのではないでせうか。粘土、お晝書き、紙芝居、お辨當等々そして出来るだけ日光の子供にさせよう。

同時に科學的の検査も出来るだけ取入れて病氣を未然に防ぐ事、健康診断も少くとも月一回はしたいものです。

郊外に出て新鮮な空氣、豊かな紫外線に浴させる爲に、園外保育も度々行つた方がよいと思はれます。今までの物見遊山の様に、親までゾロ／＼と連れた遠足は大いに改良したいと思はれます。

(二) 感謝の氣持のもてる子供に。

人に何かしていただいた時に、それが友達でもごうも有りがたうご素直に自然に言へる子供にして行きたいと思ひます。その氣持がだん／＼育つては國家皇室に對する感謝もなると思ひます。

日本の子供ださう感謝を持たせる様に、幼稚園でもお式を嚴肅に行ひ、不斷にも折にふれて皇室の御仁慈を話し

て行きたいと思ひます。「お式だから」ごお休みする家庭のない様に：：せめて式日には下着を取換へ靴も念入りに磨いて、家中でお祝をしてから子供を出す位に家庭も指導して行きたいと思ひます。

(三) 人ご一諸の生活の出来る子供に。

「皆さんで」ごいふ生活を多くして互に助け合ふ事を経験させたいと思ひます。例へば遠足の際、農園の收穫物を分ける時でも一列に竝んでお互に前の人のリュックサックを開けてつめ合ふごか、上着をぬぐ時、ボタンをはずしたりはめ合ふごいふ様に先生が一々手を下さずにお互にし合ふ様にさせたいと思はれます。今までは皆がしても、したくない時はしないでもよいのが幼稚園の様に考へられて居た點もありますが、人がする時には自分も一緒にする」ごいふ習慣をつけたいと思はれます。

(四) 努力し、忍耐してやり通す子供に。

子供ご仕事の量、性質に注意して與へて始めたら最後までやり通す習慣をつけ、完成の喜びを味はせたいと思ひます。そして完成したら先生も共に喜んでやりたいものです。

(五) 自分の言ひたい事を發表出来る子供に。

人に對して自分の考へを十分に發表出来る様に、話をする機會、喜んで聞いてやる機會を多く作つて大いに勇氣ご自信をつけてやりたいと思ひます。

(六) 人に迷惑をかけない子供に。

自分勝手を禁じて人のいやがる事をしない様に、「他の方が御迷惑ですよ」といふ事をもつて強調したいと思ひます。お友達の食事中は濟んでも静にしてゐるか、乗物の中で騒いだり紙屑を捨てない事等小さい事から習慣づけたらと思ひます。

(七) 清潔整頓を喜ぶ子供に。

いつも汚れた環境に居るに汚い事も氣にかゝらなくなりません。先づ靴のはき方、自分の引出しの整理等自分の身のまわりの清潔整頓に始り、きちんとしない事が不愉快になる様に習慣づけたらと思ひます。それには先づ子供の目にふれる環境を整理してやる必要があると思ひます。

(八) 命令に喜んで服従出来る子供に。

叱られるからするのでなく、喜んでする様にしたらと思ひます。

(九) 落つて没頭出来る子供に。

一つの仕事に遊びに没頭出来る様環境指導に注意して今の都會兒の缺點を少しでも少くして行きたいと思ひます。

(十) 朗らかなやさしい子供に。

少しの不平、いやな事は我慢していつもニコ／＼してゐる様に。

又生物の世話等をさせて愛育をか觀賞する氣持を養つて

行きたいと思ひます。

(十二) 子供らしい禮儀をわきまへた子供に。

言葉使ひ、動作等々子供なりにきちんと出来る様に。

(十三) 工夫、創作の出来る子供に。

考へて行きますが、まだ／＼澤山出て来ると思ひます。そして其の一つ／＼の目的を達する爲にさういふ事に注意して躰をするかといふ事は實際問題として大いに研究する必要ある事と思ひます。

第十七回大分縣保育會總會

去る十一月二十一、二十二の兩日、大分縣中津市の豊田幼稚園に於て大分縣保育會總會が開催せられました。出席會員百二十名。總會の日程は次の様でありました。

第一日

一、紀元二千六百年記念式

二、總會並ニ表彰式

三、議事及ビ談話

第二日

一、豊田幼稚園參觀

二、議事

三、遊戯發表

四、閉會 以上 (編輯部)

演題

中北支、蒙疆地區、ソ滿國境ニ於ケル
郷土部隊慰問狀況
講師 天門 成章氏

佳作 雀と奴風

中野 靜

(一)

廣い原つばです。お空は青く晴れて、風が上つてゐます。朝日風に、字風に、さんび風、寒い北風に吹かれながらも、これもく、元氣よく舞ひ上つてゐます。其の中に和夫ちゃんはお姉さんを連れて、原つばまで風あげにまゐりました。お年玉に頂いた奴風が、中々上らないので困つてゐます。側で遊んでゐらした、小學校の帽子をかむつた、知らないお兄さんが、

「坊や、揚らないのかい？ 兄ちゃんが揚げて上げよう。兄ちゃんは風揚げが上手なんだよ」

つてすぐ揚げて下さつたのです。和夫ちゃんは長い紐を引つ張つて喜んで居りました。

其の中、何時しか、風を揚げて居た子供達も一人歸り、二人歸りして少くなりました。

「和夫ちゃん、もう歸りませうよ」

「寒くなつたわ、もう夕方よ」

「お姉さんが、しきりに和夫ちゃんを、せき立ててゐます。和夫ちゃんも、段々くたびれてまゐりましたので、止めようと思つて、一ぱいに伸ばしてゐた紐を、たぐり寄せました。ぐんぐん下りて來た奴風が、ふき、そばの電信線にひつかゝりました。

「困つたな！ お姉ちゃんも助けて！」

二人で其の下まで行つて紐をひつばつて見ましたが、風に吹きまくられて益々紐が絡んでしま

ひます。

薄暗い原つばには、もう凧あげしてゐる子供は一人もありません。和夫ちゃんは下から石をぶつつけて見ましたが、取れる筈はありません。棒切れを拾つて來ましたが、ミッきません。

「和夫ちゃん。危いわよ。電線に掛つた凧を取つてるミ電氣が通じて死ぬんですつて、危いから、もう歸りませう」

ミお姉さんは和夫ちゃんの手を取つて、お家の方へひつばつて行きます。和夫ちゃんは見えなくなるまで電線にかゝつた奴凧を振り返りくして歸つて行きました。

(二)

もう三つぶりが日は暮れました。

雀のチー子ミ、チュウ吉兄さんは、お家へ急ぎました。

「今日はミても面白かつたわね」

「うん、御馳走もうんミ食べられたしね」

「くたびれたから、ちよつミミミで休んで行きませうよ」
チー子ちゃん雀は、電信柱の横木に止つて、羽を休めました。チュウ吉兄さんも並んで止りました。

「あらつ！ 何だかあそこにふわく動いてるわ」

チー子ちゃんは兄さんのそばに抱きついて來ました。

「お兄ちゃん、恐いよ」

「大丈夫だよ、兄ちゃん見て來る」

チュウ吉さんが、近くにこんで行きますミ、凧です。風に吹かれて、ふわく動いてゐるのです。さつき和夫ちゃんに、おいてきぼりにされた奴凧です。

「チー子ちゃん奴凧だよ。お家へお土産にしよう」

「凧つて こわくないの?」

チー子ちゃんもお兄さんの所へ飛んで行つて、二羽のくちばしでひつばつて、絡んでゐる紐を上手にほぐしました。

「よかつたわね。お父ちやまも、お母ちやまも、びつくりなさるでせうね」

「うん。さあ、早く歸らう」

二羽の雀は、大喜びで奴凧の兩のお袖をくわへて、元氣よく、羽ばたきして、飛んで歸りました。森のお家へ著いた時は、何時もより遅いので、お母様雀もお父様雀も心配してゐました。お土産の奴凧を、二人共大へん喜んで下さいました。でも木の洞のお家は、狭くて中に奴凧さんを入れる事が出来ません。

「仕方がないから、此處に立てゝ置きませう」お母さん雀は、おつこちないやうに、奴凧を洞の入口に立てゝ、紐を小枝に結びつけて置きました。

それからチー子ちゃんも、チユウ吉さんをおだつこして下さいました。

「チユウ吉も、チー子も、よくお聞き。こんな遅くまで外で遊んでゐては、いけませんよ。あのね、向ふの森の、恐い小父さん雀が、方々の可愛いゝ子雀を、さらつて行くのですつて」

「まあ恐いわね」

「ですからお日様が、西のお山にかくれておしまひにならない中に歸るのですよ」

「ええ」

「ええ」

(三)

其の次の日です。

向ふの森の恐い小父さん雀は、あちらこちらのかはいゝ子雀をつかまへて逃げる恐い雀でした。夕方になつて、今日はチー子ちゃんもチユウ吉さんをつかまへようゝ、洞のお家に近寄

つて来ました。洞の中からは、二人のかはいゝお歌が聞こえてまゐります。

「チュウ、チュウ、父さん

チュウ チュウ 母さん

早く歸つてらつしやいな、

お米に、小蟲に、木の實や、

おみやげ、たくさん、待つてます」

「ははア、今日は二人きりで留守番らしい」

小父さん雀は、すぐそばの枝まで飛んで行つて枝傳ひに近づくと、さうでせう。恐いゝおひげをピンピン生やして、腰に刀をさしたお侍さん。そして大きな丸いお目々で、じつと小父さん雀を、にらみつけてゐます。田圃で見る案山子より、もつとゝゝ恐いお顔をしてゐます。

「おう、恐い、お侍の番兵だ。恐いゝゝ」

何にも知らない小父さん雀は入口に立つてゐる奴傭さんを見て、遠くへ逃げてしまひました。

かうして和夫さんの奴傭はこんな淋しい森の中に連れられて來ましたけれども、チュウ吉さんミチ子さんの仲好しになり、大事にされて、ほんまに、よかつたと思ひました。

お時計と虹の子供

山本フミ子

お時計が未だ今の様に澤山無かつた頃のお話です。

町の時計屋さんに色々の時計が並んで居りました。そして朝から晩迄コツコツ、ボンボンにぎやかな音をたてゝ居りました。其の中の一つが或るお家を買つていたゞいてお二階の柱に

かけられました。お家は坂の上なのですつゝ遠い所迄よく見えます。お家の方はお父様もお母様も坊ちゃんもお嬢ちゃんもお時計が来たお時計が来たお皆珍らしがつて大事にして下さいませ。けれどお時計は今迄のお友達の多かつたお店からこゝへ来て、急に一人ボツチになりましたので淋しくてくゝなりません。お店へ歸り度いゝさばかり思つて居りました。ですからお時間を知らせる時になつてもボン／＼云ふ音が段々元氣がなくなつて來ました。お空にゐらつしやるお日様は之を御覽になつて、さうかしてお時計を元氣にして上げ度いさ御考へになりました。それは御自分も朝やお晝や夕方を皆にお知らせしてゐらつしやるからなのです。

次の日、朝から降つてゐた雨が晴れて、きれいな青空が見えて來ます。きれいな／＼虹が出ました。お日様はそれを御覽になつて「あゝさうだ、あの虹にお頼みませう」さ虹にお時計の事をお話してよくお頼みになります。虹も「ハイ承知しました」喜んで御返事をしました。

次の朝、外は未だ暗くお家の人もねむつてゐる頃、お時計は淋しさうにボンボンボン……四ツを打ちました。四時ですね。するさ／＼小さい音がして赤いきれいな着物を着た小さい／＼こんなに小さい(小指位)女の子がお空から飛んで來ました。

時計さんお早やうございます。私は虹の子供ですよ。

お日様からお頼みされて私達七色の子供が之から時計さんの所に來て、色々面白いお話をし時計さんを少しも淋しくない様にして上げるのですよ。

今ね、遠い、お空から飛んで來る時あの森を通つて來ました。澤山の小鳥達は、もう目を覺ましてピー／＼チーチーにぎやかなお歌を歌つて居ました。わたしが小鳥さんお早やう云ひましたら、たーくさんの小鳥があちらからもこちらからも飛んで來て私の周りに一杯になりました。

『小鳥さんこんなに早くから きて何をするのですか?』さきまましたら、

『わたし達は朝が来たのが嬉しくて眠つては居られません。お目々が覺めるにすぐ嬉しいな
く、お早やうくミ精一杯鳴きます』するごお母さんの小鳥が、

『わたしは可愛らしい赤チャン鳥に美味しい御馳走をさがしに行きます』

『僕はネ、きのふ見付けて置いたサクランボの木に行つて赤い果をさつさりいただきます』

『わたしは此のお山の下にきれいなお水の出る所に行つて水遊びするのが楽しみ』

ご色々お話して呉れましたよ時計さん。ホラ、よくきいて御覽なさい、此のお家の廻りにも小
鳥が鳴いてゐるでせう。ではネ、又あみからわたしのお友達が來ますから楽しみに待つて、下
さいね』虹の子供はお空へ歸へつて行きました。

時計さんはうれしくてくくなりませんでした。そして今のお話を幾度も思ひ出してゐました
ら、圍りの小鳥の聲も皆嬉しいくきこえて來ました。

ボン／＼／＼……八ツ打ちました。八時ですネ。

今度は橙々色のお帽子ミ洋服を着た虹の子供が小さいラッパを吹きながら勇ましく飛んで來
ました。

『時計さんお早やう。今僕が飛んで來る途中お道を澤山の人が歩いてゐました。皆ここへ行
くのかきゝ度くなつて、一番小さい人が持つて居る四角いものにきゝましたら、

『わたしはバスケットミ云ふの、中には美味しいお辨當やコップが入つてゐるの、そして此
の坊チャンミ幼稚園へ行くの』ミうれしそうに云ひました。

も少し大きいお姉さんが何かお肩に負つてゐらつしやるので又きいてみましたら、

『わたしランドセルよ、中には御勉強のお道具が入つてゐます、之からお嬢さんは小學校に
行つて色々な事を教はつて賢い人になるのですよ』云ひました。

かうしてきゝましたら、お父様方は銀行や會社ミ云ふ所にゐらつしやるのですつて。まだ他
にお野菜やお豆腐を賣りに行く小父さん、トントンミお家を作つてゐる大工さん、お掃除をして

るお母さん、皆朝が来た／＼忙しそうでした。時計さん、では又お友達が来る迄待つて、下さいね。さよなら」を歸へつて行きました。

ボン／＼／＼十一時を打ちました。時計は虹の子供が早く来れば良いを待つてましたら、遠い空から黄色い洋服をひら／＼させて、お日様の光の中をまぶさうなお顔をして、虹の女の子が飛んで来ました。

「時計さん今日は。今ネ、わたしお人形を作る所見て来ました。お仕事場にはきれいなお着物を縫つてる人、お顔を畫いてゐる人、お髪をつけてる人、日本人形も西洋人形もお目をクリ／＼させて私の方を見てました。並んでるお人形に、皆さんは之からさこへらつしやるのさき々ましたらわたし達方々のお店に行くのよ。汽車に乗つたり、船にのつたり、にぎやかな町のお家や、淋しい田舎のお家の子供さん達に買つていたゞいて、可愛がつていたゞきますの。わたし達は、それが楽しみで早く行き度くてなりません云ひました。時計さん、ホーラ此の御部屋にも飾つてあるでせう」

時計さんはお人形さんも自分と同じに、お店から来た事を知つてお友達が出来たのを喜びました。

お晝過ぎになりました。お時計はお空を見ながら虹さんは未だかしら、虹さん／＼コッコツコッコさん／＼コッコツコッコ待つて居ます。一時を打つた頃、バタ／＼／＼緑色のマントを着た子供が大急ぎで飛んで来ました。

「時計さん、今ネ、お空から下りて来る途中、ムク／＼した雲が大急ぎ／＼／＼下の方に下りて行きました。『雲さん／＼そんなに急いでさちらへ？』さき々ましたら、『わたし達は之からお地面にお水ツブを落しに行きます』つてとても大急ぎでしたよ。そう云つてる間にもうあんなに雲が一杯。ア、音がする。きいてごらんさい。お屋根にも木の葉ツバにもお窓にも」

雨はバタ／＼／＼氣持の良い音をたて、降つてます。虹の子もお時計は外を見てゐましたが、

「もう止みさうだから僕歸りませう。此のマントを着て来て良かった。さお體をしつかり包んで歸へつて行きました。雨はすつかり止みました。今の雨でぬれてゐる木の葉やお花や、うれしそうな小鳥の聲、お遊びに出た坊ちゃんやお嬢ちゃんの聲。其の内に雲は遠くへ行つて、お日様のお顔も見えて来て、遠いお山もはつきり見えて来ました。お時計は體中がすつかり氣持良くなつて来ました。」

三時を打ちます。水色のお洋服の子供が何か急いで、ハーハー息を切らして飛んで来ました。「時計さん、早くあれを見て頂戴。お空の向ふに見えるもの、きれいでせう。あれが私達の虹ですよ。」

晴れた青空に、お山からお山へかゝつてゐる虹の橋、よく見る。さつき来た虹の子供達が皆ニコニコして自分を見てゐるのです。時計さんはごんなにうれしかつたでせう。

「わたし達ネ、雨が上る。時々お日様が虹よ〜と呼んで下さるの。する。大急ぎで集まるのですよ。之から夏になる。時々出ますから時計さんも見て下さいね。」

そして虹の子供が歸へつてから段々夕方になりました。薄暗くなつて七時を打つた頃、藍色の着物の子供が靜かに御部屋に入つて来ました。

「時計さん。今お畑に寄つて来ました。さつき雨が降つたばかりなので田圃にはお水が一杯。畑の土は軟らかで稲やお野菜が嬉しい〜云つてました。畑の土にそつとお耳をつけてみましたら、土の中の根が皆、伸びませう〜とお水を吸つて居りました。時計さんが今夜コツ〜してゐらつしやる間にあのお野菜達は太れ〜伸びよう〜。一生懸命なのですよ。ずい分暗くなりましたネ。わたしは六番目、も一人のお友達は何のお話を持つて来るでせう。」

本當に靜かな夜になりました。町の音も聞えなくなりお家の方もお寝みになりました。十一時を打つた時、董色の透き通つた美しいお洋服の子供が靜かに入つて来ました。

「今晚は、時計さん。私は嬉しいのよ。良いお話をきいて来ました。それはね、大きな〜

眞黒なお體で、車が澤山ついてゐて煙突から煙を出して走る汽車、中にはお客さんが澤山乗つて居りました。さてもく早いので私も負けずに夢中で飛びました。丁度良く停車場へ着いたので大急ぎで御話をきいて見ましたら、御用のある人達や、大事なお荷物を乗せて遠い所へ連れて行つて上げるのですつて。途中には鐵橋もあるしトンネルや坂もあるし、運轉手さんも機關手さんも車掌さんもちつさもおねむりにならないでお仕事をなさるのですつて。

此の小父さん達も、停車場の小父さん達もお客さん達も、大變時間が大變だから、それを知らせて呉れてお時計をそれはく大切になさるのですつて。時計さんは本當に偉いのネ。ですから早くお話して上げ度いさ樂しみにして來ました。時計さん、又明日來て上げませうね。さよなら」虹の子供が歸つてから又靜かな夜になりました。いつもは淋しいく夜なのですが今は少しも淋しくありません。

それどころか、「汽車も一生懸命、畑のお野菜も一生懸命、私も一生懸命」さ體中の機械が段々元氣になつて來ました。

朝になつて、お日様は一番初めにお時計の元氣な様子をご覧になつて大層御安心なさいました。それから虹の子供は時々來ては珍らしい面白いお話をきかせてくれました。それにお店で一緒に居たお時計も、いつの間にか皆色々なお家に買つていたよいて、お家の人に大事なお時間を御知らせしてゐる事も知りました。

人も動物も木も花も何もかも皆自分のしてゐる事が一番うれしい事。今のお家の方にはお時計が無くてはならない事。色々なお話をきいて、いつの間にか淋しい事なごすつかり忘れて、毎日々々嬉しいくさ云ひながら、お家の人々に大事なご用を一生懸命にして居るのです。

(以上)

幼児の 母



昭和十五年

十二月

わが子の一年

ことしも暮れます。お母さま方は何かとお忙しいこととせう。わけても事の多い此の年の暮の忙しい中ですが、静かにふりかへつて見ずにゐられないのは、わが子の一年です。不斷の成長をつとけて育つてゆく子どもの一年々々ですが、考へて見れば、ことしも亦、なんとといふ有り難いことでしたらう。氣がついて見れば、背丈も伸びてゐます。心のはたつきも、ほゞ笑ましい程進んでゐます。わが子の成人を希ふ親心からは、もつともつと、まだかゝ、といった願ひの勝つのも無理からぬことではありますが、

それと同時に、日々その時々の感謝もなくてはなりません。無事に成長をつづけた一年として、或は又、いろゝの障りにも打ち克つて此の年を送り得る今として、一とくぎりの感謝を思はずにはゐられません。殊に、大切なわが子の成長史の一卷として、その中には永く記念すべきことも尠なくなつた筈です。謂つて見れば、ことしのお蔭で、わが子の成長が内からも外からも盛り上げられてゐるのです。

忘年といつた言葉もありますが、充實から充實へつゞくわが子の生涯の中で、ことしも亦忘れてならない貴い年でした。

母のこよみ

ことしのお歳暮とお年玉

わが子の爲に、ことしはどういふお歳暮をやりませう。又、どういふお年玉を用意ませう。これは十二月の母の一つの楽しみであるに相違ありません。又、なるべく澤山、子供を喜ばせてやりたいことに、異議のあるものはありません。

たゞ、ことしの暮も来るお正月も、時局下だといふことを、殊に、寒い戦地に澤山の兵隊さんが行つてゐて下さることを、更に、傷病兵の方々が病院のベットにゐられることを、假りにも忘れることは出来ません。そこで、お歳暮もお年玉も、その心持ちを失はぬものにならなければなりませんし、兵隊さん達への感謝のお歳暮、お年玉といふ方にも心を配はられなければなりません。——勿論、子ども達を喜ばすことを忘れずに。

幼稚園でしてゐるこころ(五)

唱歌

倉橋惣三

「今日は大層お静かです。お休みでせうかと思ひました」

「こんなに、子どもが騒いでありますのに」

「いゝえ。いつものピアノの音がしませんので」

「ハ、ア」

「ピアノが聞えませんが、幼稚園らしくございませぬね」

「ハ、ア」

「いやですなえ先生、ハ、ア、ハ、アばかりおつしやつて。ほんとにそうちやございませぬの」

「ハ、ア」

「あらまた」

「ピアノの音は幼稚園の気分を出しませぬ。しかし、幼稚園だつて始終音楽ばかりしてゐる譯ぢやありませんよ。音楽學校ぢやないのでから」

「またあんなことおつしやつて。そりやあ、舞踊學校でないで、先達つてもおつしやいましたやうに、音楽學校ぢやございませぬことは存じてあります」

「そうなんです。がね、こう申したからつて、幼稚園で音楽を軽く見てゐるのでは決してありませんですよ。たゞ、幼稚園といへば、遊戯と唱歌と考へてゐたりする藝術教育主義者、乃至お慰み主義者には、賛成出来ないといふ丈けのことです」

十二月の獻立

榮養研究所 佐々木理喜子

御寒くなりましたので體の温まる御汁を作りませう。うどんを用ひて代用食にも役に立つ様に、工夫します。さつまいもで簡単なお入つた作りでしたが、御子様達はきつと喜んで下さいます。

(一) スチウウどん

材料 うどん五二〇〇瓦 豚肉三〇〇瓦 馬鈴薯三〇〇瓦 人参一五瓦 玉葱三〇〇瓦 油六瓦 片栗粉三瓦 以上で 蛋白質一三・九瓦。温量 三三一カロリ

作り方 うどんは少し短く切り、さつと御湯を通し井に盛付け、次のスチウウを上からかけます。豚肉、ポテト、人参、玉葱は程よく切り、油でざつと炒め、ポテト、人参を鍋に入れて汁をたつぶり入れて煮ます。軟くなつた時に、豚肉、玉葱を入れ、よく煮て、鹽で味をつけ、醬油を少し加へます。子供には胡椒は用ひませぬ。

「ハ、ア」

「こんなでは、あなたの方がハ、アですか。併し、幼児教育に音楽は非常に大切な役割をもつもので、いゝ曲譜の唱歌を歌はせることは極く必要です。のべつ幕なしではなく、いろ／＼のお仕事の間にはさんでね」

「どの程度にお教へになるんですか」

「教へるといふ程でもないのですが、歌はせる以上、成るべく正しく歌はせたいものです。そうしないと、第一、耳が悪くなりますし」

「へ、エ中耳炎にでも」

「まさか。耳の練習が出来ないのでね。音楽の第一は耳ですからね。聴音が正しく出来て、それで正しく歌へるのですからね」

「音階練習から」

「それも大きい子には、していゝことでせうが、大抵は直ぐ曲を歌はせます。子どもがその方が好きですし、歌ひたい心をもとにして指導出来ますからね。實際子どもは、歌ふのを好みますから」

「そう致しますと、先生がいつも言はれるやうに、唱歌も、子どもが歌ひたい心を充たしてやるのが第一なのでございませうね」

「そう、全くそうですよ。たゞね、音楽は他のことと違つて、耳の教育といふ點で、正しい歌ひ方を聴かせ、正しい歌ひ方をさせなければならぬところに、幼稚園としての苦心があるのです。幼稚園時代から、何も上手な歌うたひに仕込むことはいらないので、正しくない音や、亂れた譜で、耳を誤らせることは、してならないことですから」

「さようでございませうね」

「ですから、無暗に澤山歌はせるばかりがいゝといふ譯にゆかず、そういうことは却つてよくなかつたりするのです。但し、幼児に、そうやかましく音楽的練習をさせることは出来ませんし、自然、歌ひたい心の方を主に、一方のことを注意するといふ具合になります」

「天才もあらせうね」

「そうですよ。音楽はどいふことにな

(二) 里芋と鱈の子

材料 里芋四〇瓦 鱈の子二〇瓦 油 揚一〇瓦 白菜三〇瓦 人参一〇瓦 以上蛋白質八・七瓦 温量一〇六カロ

リー

作り方 里芋は皮のきたない所だけとつて普通に切つて煮付けます。鱈の子は外の皮を切つて煮付け、鹽、砂糖で味付け、ポロ／＼にして里芋にまぶします。油揚は細く切り、白菜、人参も織切り、一緒に煮付け下汁の出ない様にかち／＼にして、里芋に附合せます。

(三) さつまいものお饅頭

材料 さつまいも一〇〇瓦 片栗粉一 二瓦 砂糖少々、以上で一五四カロ

リー、(一回分のお入りの量)

作り方 さつまいもは普通に蒸して、皮を取りよくつぶします。砂糖と鹽を加へて餡の様に煉ります。一人分を三個に丸め、片栗粉をよくまぶして、御飯蒸しで十五分蒸します。片栗粉で薄い皮が出来ます。經木が、紙を一吋角に切つて此の上のせて蒸しますと、蒸し釜につかないでよろしいございませう。

ると、皆同じといふ譯にゆきません。天才的な子があつたら、それを正しく發見して、又特別な指導を考へなければなりません。併し、それは一般の保姆さんでは、中々むづかしいことです。殊に發見がね」

「そうでございませうね」

「發見し得ないのも濟まんことですが、一寸ばかり聲がいきとか、器用だとかいふので、天才扱ひも困りますからね。それが、當節、相當危険なのです。ラヂオ用小音楽家としてなごね」

「天才の反對に、全く歌へなかつたり、きらひだつたりする子もありませうね」

「ありますね。たゞ、幼稚園としては、出来るだけ或程度迄の教育はしたいのですから、そつういふ子も、容易にだめだとして仕舞ひません。殊にそつういふ子ども、つまり嚴密なピアノの音律に適しなくとも、太鼓とか、時には、もつと雑な音律でも、リズムの教育は是非したいし、出来るものです」

「いつか樂隊でしてゐらつしやいましたね」

「あれも、そつういふ子を導いてゆくにいやうですよ。リズムだけは一通りのところまで教育したいですね。それは、ただ音楽ばかりでなく、全體の教養に大きな關係をもちますからね」

「リトミックですか」

「そこまでは兎に角、リズムを感じ、リズムを解し、リズム的に生活し得ることは、確に教養の一要素ですから」

「あ、ピアノが聞えてゐますね。これから唱歌でせうか。一寸違ひますね」

「あれは、音感教育を試みてゐるので、絶対音といふので、近來いろ／＼の意味で主張されてゐるのですが、幼児期にどこまで適切か、可能にしても、全體の教育とどう關係するか、今はまだ實驗してゐるところです。これは、研究の上で、またお話ししたませう」

「幼稚園でしてゐらつしやることに就て、いろ／＼と、なが／＼有り難うございしました。またくわしく教へて頂きます」

立ちばなし

寒中の竹の子

鍛錬といふとささも殿しいこのやうですが、寒からう／＼で包み過ぎ、護り過ぎて厚着の習慣をつけるのも、少くも程々にしなければなりません。幼稚園などで時々斯ういふ子どもが目につきます。厚い肌着、厚い真綿、厚い毛絲、厚いものを幾枚も／＼厚く重ねて、ぬく／＼とふくらんでゐる子です。あんまり着重りで動くことも出来ないのもあれば、それで動くので、下は汗でじつと蒸れてゐるものもあります。どつちにしても、却つて風をひき易くしてある譯になりません。

昔、支那に、寒中雪を掘つて親の好物の竹の子を取り出した孝子があつたそうですが、これはまた、わが子を寒中の竹の子にする親です。わが子に寒中竹の子を要求する親も親ですが、わが子を季節はずれの竹の子にする親も親ですな。

ハイデ

イ
(第二十九回)

津田芳雄譯

御飯がすんでみんながいろんなお話をしてゐる時、クララはお父さまをわきへ引つ張つて行つて、今までにない熱心さで云つた。

「お父さま、おぢいさんは、毎日それはそれはよくして下さつたのよ。おぢいさんの親切は、數へ切れないくらいで、あたし一生忘れないわ。それであたし、さうしたらせめてその半分でも、御恩がへしが出来るかしら、いつも考へてるの。ねえお父さま、何かして差し上げたいわ」

「それこそ、わたしののぞむところだ」
お父さまはさもうれしそうに、娘の顔を見ながら云つた。

「わしも丁度今、さういふ風に御恩がへしをしようか、考へてゐたところなのだ」

ゼーゼマン氏は、おばあさまに面白さうにお話をしてゐるおぢいさんのところへ行き、その手を取つて云つた。

「少し御相談があるのですが。わたしはもう何年間さういふもの、眞の幸福さういふものを知らずに過ごしてきました。金や財産が、何になりませう。山を積んでも、可愛い子供の病氣ひさつなほせないものであつて見ればねえ。ところがお蔭様で、あなたはあれをすつかり、丈夫にして下さつて、あれの爲めばかりでなく、わたしのためにも、新しい生涯を拓いて下さいました。何かかして、その御恩にお報いしたいと思ひます。もちろん、し盡せるものではありませんが、わたしに出来るだけのこきは、何でもさせていだきたいのです。」

さうか何なりと、仰しやつて下さい」

おぢいさんは満足さうにほほゑみながら、しづかに聞いてゐるが、やがていつもの威厳のある調子で答へた。

「ゼーゼマンさん、お嬢さんが快くなられましたことは、わたしも非常に喜んで居ります。骨折りもなにも、もうそれですつかり償はれてしまひましたのぢや。御志は心から御禮申し上げますが、わたしには何も欲しいものもありません。わたしの目の黒い間は、わたしもあの子も、まつ、不自由はしますまい。ただ一つ、のぞみがありますのぢやが、それさへ叶へばもうこの世に何の心配もありません」

「さうかそのお望みさいふのを、仰しやつて下さい」

ゼーゼマン氏は頼んだ。

「わたしもだんだん年をきり、もうあまり長いこともありません。わたしが目をつぶれば、あの子は遺産はなし、ほかに身寄りさいへば、たつた一人、それも始終あの子を利用することばかり考へてゐるのが居るきりですのぢや。あの子が他人の中へ出て行つて苦勞せずともよいやう、面倒

をみてやるに御約束下さるならば、これに越す有難いことはありませんのぢや」

「ああ、そんなことならば、もちろん仰しやるまでもありません。あの子は實の娘だと思つてゐるのですからね。他人の手になぞかけてよいものですか。第一、わたしの母や娘が承知しませんよ。御心を安める爲めに、改めてここにお約束します。ハイディには他人の中へ出て生活の苦勞なき絶對にさせないこと、それはわたしの生存中は無論のこと、死後も引き續いてのことであること。それから、もう一つ別のお話があるのです。うちにしばらく來てゐて證明すみなのですが、あの子はこの土地を離れて住むことは、全く不向きです。ところが丁度都合よく、あの子を非常に可愛がつてゐる、昨年の秋こちらにお邪魔したうちのお医者さんが、すつかりこの土地が氣に入つて、あなたのお勤めに従つて、近々フランクフルトを引き揚げて、ここへ永住しにやつて來ることになつてゐます。さうすれば、あの子は二人もの保護者と一緒に暮らすことになり、もう大安心なわけです。さうかお二人とも、せいぜい長生きをして、末長くあの子の世話をみておやりになつて下さい」

「わたしも心からそのやうに祈つてみますよ」

おばあさまもおぢいさんの手をきつて、全く息子と同じ考へであるこゝを述べ、今度はそばに立つてゐるハイディの肩に手をかけて引き寄せた。

「あなたも聞かせて下さい、何か特別に欲しいものがありますか、ハイディちゃん」

「ええ、ありませんわ」

ハイディはうれしそうにおばあさまを見上げながら、即座に答へた。

「では仰しやい、何ですか」

「わたし、フランクフルトでわたしが寝てゐた、高い枕さふかかしたおふさんのついた寢臺がほしいのです。そしたら、ペーテルのおばあさんが、あんな息も出来ない、頭の方が低くなつたお床で、肩掛けなんか着て震へてゐなくてもすむんです」

ハイディは夢中で一息に云つた。

「まあ、なんてやさしい子でせうね」

おばあさまは感動して云つた。

「よくもペーテルのおばあさんに気が付いてくれました。さかく人間は、うれしいこゝがあるさ、もうそれに夢中になつて、何よりも先きに思ひ出してあげねばならない氣の毒な人たちのこゝを忘

れがちなものです。早速フランクフルトへ電報を

打ちませう。ロッテンマイアさんが今日荷造りをすれば、二日経てば届きますよ。おばあさんも、もうちき氣持よく眠れるやうになりますね」

ハイディはうれしがつて、おばあさまのまはりを跳んでゐるいてゐたが、急に立ち止まるさ、大急ぎで云ひ出した。

「わたし、すぐに行つておばあさんにさう云つて来てあげるわ。それに、あんまり長いこゝ行かなかつたから、心配しててよ、きつさ」

「これこれ、ハイディ、何を云ふ。お客様がゐられるのに、さうばたばたするものでない」

おぢいさんがたしなめた。

けれどもおばあさまは、ハイディの肩を持つて云つた。

「いいえ、あの子がわるいではありません。可哀さうに、おばあさんは長い間、わたしたちにハイディを取られてゐたのですからね。みんなでこれから訪ねて行つてあげませう。わたしの馬も待つてる筈ですから、そこからデルフリまで下りて、早速電報を打つこゝにませう。あなたはさう思ひますか?」

おばあさまは息子を振り返つた。するさぜーゼマン氏は、ここへ来るまでは、クララのからだの工合さへよければ、ほんの少しだけでもスキス旅行に連れて行きたいと願つてゐたところ、クララはこの通り元氣なので、もう全行程を一緒にに行けるから、さうなれば、この美しい夏の末を取り逃さずに、少しも早く出掛けたいから、今夜は自分はおばあさまと二人でデルフリに泊り、明日の朝早くクララを迎ひに来て、三人でラガツ温泉から發つことになつたといふ考へを申し出た。

クララは、はじめはそんなにもだしぬけにこの山とお別れするのがいやだつたが、一方又、旅行のこゝを思ふと、たのしみでもあつた。それに、そんなに悲しがつてゐるひまもないのだつた。おばあさまはもう、ハイディの手をひいて先頭に立つてゐた。クララはおぢいさんに抱かれ、ゼーゼマン氏を殿に、かうしてみんなは山を降りて行つた。ハイディはおばあさまと並んで歩きながら、うれしくつて跳ねまはつてばかりゐた。おばあさまはペーテルのおばあさまがさうやつて暮らしてゐるか、殊に冬の寒い時にはさうしてゐるかなど、いろいろと訊ねた。ハイディはおばあさまのこゝな

ら何でも知つてゐるので、冬の寒い時は隅つこにうづくまつて震へてゐるこゝや、おばあさまの家にはぎんな食べものがあり、ぎんなものがないか、さういふこゝまで、すつかり話してあげた。おばあさまは、小屋に著くまで、思ひやり深くちつと耳を傾けてゐた。

この時丁度ペーテルのお母さんは、ペーテルの著換へのシャツを乾しに出てるたが、みんなの姿を見るに、急いで家に駆け込み、おばあさんに報告した。

「みんなが通つてゐるよ。きつミフランクフルトへ歸るんだよ。アルムをぢさんが病氣のお嬢さんを抱いてるよ」

「ああ、そんなら、いよいよさうなんだね」
おばあさんは溜め息をついた。

「ハイディも一緒かえ。それぢや連れて行くんだねえ。ああ、せめてちよつこでも這入つて来て、もう一ぺんだけ、お手々を握らせてくれたらばねえ。聲だけなりと、聞かせてくれたらばねえ！」
この時、戸がさつと開いて、ハイディが轉がり込んで来て、おばあさんにしがみついた。

「おばあさん、おばあさん、三つも枕のついた、

ふかふかしたおふさんの、わたしの寢臺がフラックフルトから届くのよ。二日すれば来るつて、おばあさまが仰しやつたわ」

ハイディはさう云ふ間ももごかしく、早くおばあさんの喜ぶ顔が見たかつた。でもおばあさんはかすかに笑ひ、さびしさうに云つた。

「ほんたうに、御親切なお方だねえ、お前さんがそんなお方に連れて行つていただくのなら、わたしは喜ばなくちやならないのだが、わたしももう、長生きは出来ないのねえ」

「なんですつて？ 誰がそんなことを、大事のおばあさんにお聞かせしたのでせうね」

やさしい聲がして、ペーテルのおばあさんは、誰かにしつかり手を握られた。ハイディについて這入つて来たおばあさまだつた。

「大丈夫なんですよ。決してそんなことは考へなくていいのですよ。ハイディはごこへも行かずに、これからもずうつぎ、あなたをお慰め出来るのですからね。わたしたちもハイディに逢ひたくなれば、又やつて來ますよ。このアルムのお山へは、毎年お邪魔したいと思つてゐます。わたしたちはここで、宅の子供に、それはそれは大きな御

恵みをいただいたのですから、毎年その場所で神様に御禮を申し上げに、登つて來たいのですからね」

するさペーテルのおばあさんの顔は、はじめとしんからうれしさうに光り輝き、幾度も幾度もおばあさまの手を握りしめては、うれし涙にむせぶのであつた。ハイディはそれを見るさ安心して、大悦びでおばあさんにかぢり付いて云つた。

「おばあさん、なにもかも、せんに讀んであげた讚美歌のさほりになつたわね。フラックフルトから寢臺が來れば、病氣だつて、きつさよくなるわねえ」

「さうごも、ハイディちゃん。そのほかに、數へ切れない位いろいろの結構なものを、神様からいただいたよ。ああ勿體ない、勿體ない」

おばあさんはすつかり感激して更につづけた。

「——ほんたうに、こんな憐れな年寄りを、御心にかけて、なにくれさ心配して下さる親切な御方が、こんなに澤山ゐられようさは、思ひもありませんでした。そんな御方のゐられることを思ふさ、もの數でもないわたしのやうなもののごさまで、決して御忘れなさらぬ神様の御恵みが、し

みじみ有難く思へましてねえ」

「わたしたちは、神様の御眼から御覽になれば、みんな同じやうな憐れな頼りないものばかりで、神様はその一人一人をみんな御忘れなく、同じ様に御恵み下さるのですよ。さあ、もうおいごましなればなりません。——でも、ほんのしばらくの間ですわね。來年こちらへ來る時は、一番にあなたのところへお寄りしますよ。それまでだつて、あなたのこゝは決して忘れずにもりますからね」

するごペーテルのおばあさんは、御穩居さまをなかなか離さないで、心から御禮をのべた上、この親切な恩人の上に、幾重にも神様の御恵みがありますやうに、お祈りするのだつた。

やつごの思ひで、おばあさまとゼーゼマン氏はいごまを告げて山を下り、おぢいさんはクララを抱いて、ハイディを連れて山をのぼつた。ハイディはおばあさんのこゝを思ふさうれしくて、一と足毎に跳びはねてゐた。

でもあくる朝のお別れは、クララにはほんたうに辛かつた。この山の家ほぎたのしく暮らしたころは、ないのだつたから。ハイディは一生懸命になぐさめようとした。

「夏なんか、ぢきに來てよ。そしたら、ほら、今度ほもつと面白いわね。初めつから、二人でどこへでも歩いて行けるのですもの。毎日山羊とお山へ行つて、お花のいっぱい咲いたところまで遊びませうね」

ゼーゼマン氏がクララを迎ひに來て、おぢいさんご名残を惜しみながら、立ち話をしてゐた。クララはやつご涙をふいて、

「ペーテルと山羊たちに、よろしく云つてね。『小さい白鳥』には特別にね。あたし、『小さい白鳥』にはごてもお世話になつたから、なにかやりたいんだけさ」

「ぢや、いいものがあつてよ。お鹽がいいわ。夕方山から歸つて來て、おぢいさんの手からお鹽を舐めさせてもらつて、『小さい白鳥』がごてもよろこんでゐたの、あんた知つてるでせう？」

クララはその思ひ付きに、大よろこびだつた。「ぢやあたし、フランクフルトに歸つたら、お鹽を百貫目ほぎ送るわね。あたしの思ひ出につて、『小さい白鳥』にやつてね」

ゼーゼマン氏は、二人の子供たちに出發の合圖をした。クララはもう寢椅子でかついで行かなく

てもよくなつたので、おばあさまの白馬が待つてゐた。ハイデイは坂の一端端れまで走つて行つて、馬も、乗つてゐる人も影の見えなくなるまで、手を振つてゐた。

寢臺が屈いた。おばあさんは夜さほしやすやすとよく眠れるやうになつた。この分では病氣もいまにすつかりよくなるこゝだらう。クララのおばあさまは、まだその上に、山の冬の寒さを忘れずに、いろんな温い著物をいっぱい送つて下さつたので、おばあさんは丸々著ぶくれて、今年の冬はもう、あの隅つこで震へてゐなくてもよいだらう。

デルフリ村では、今大仕掛けの普請がはじまつてゐる。お医者様がいよいよ引き揚げて來たのである。今のところは、家の建つまで、去年泊つた宿屋に泊つてゐる。みんながおぢいさんミハイデイが冬の間に住んでゐたあの古い家を買へて勧めし、天井の高さや、立派なストーヴから見ても、昔はたしかに相當の人の住ひだつたらしいので、お医者様は買ひ取つて、手入れをさせてゐるのである。おぢいさんの獨立心の強い氣象をよく知つてゐるので、家を半分に仕切り、一軒には

お医者様が自分で住み、お隣りにおぢいさんミハイデイが暮らせるやうに、修繕させてゐるのである。裏庭には、二匹の山羊の氣持のよい冬の宿に、温い丈夫な壁の山羊小舎まで、用意されてゐる。

お医者様とおぢいさんとは、日増しに仲よしになつて、毎日普請場を見てあるきながら、話は又してもハイデイのこゝに落ちて行くのだつた。二人にまつては、この家で、あの快活な子供と一緒に暮らせるさういふのが、なによりのたのしみだつたのである。

ある時も、かうして並んで普請場に立ちながら、お医者様はおぢいさんに云つた。

「多分御同感だと思ひますが、わたしはあの子は親身の娘のやうに思つて、たのしみもあなたと同じ様に分けていただいでゐますので、さうかその責任も分けていただいで、出来るだけのこゝをさせていたきたいのです。さうすれば、なんだかしせん權利もあるやうに思へて、年をまつてからも、安心して世話をしてもらへるやうな氣がするのです。あの子に最後の世話をしてもらふのが、わたしのたつた一つののぞみで、今からたのしみ

にしてゐるのですが。あの子には、あなたやわたしがあるなくなつたあさまでも、安心して行けるやうに、わたしの娘として、將來の備へをしてやりたいのです」

おぢいさんは、何も云はずにお醫者様の手を握りしめた。お醫者様には、おぢいさんがさんなに感激し、感謝し、喜んでゐるかが、その眼の色でわかつた。

ハイディミペーテルは、この時おばあさんと一緒にゐた。ハイディには、お話しすることが山ほごあつたし、聴き手は一生懸命なので、三人さも息もつけないくらゐ夢中になつて、だんだんそばに寄つて來た。夏からこちら、逢つてしみじみお話しするひまなご殆んごなかつたので、お話しはいつまで経つても盡きるまゝを知らなかつた。この三人のうち、誰が一等うれしさうにしてゐるかさいふごきは、きめるのがむづかしさうである。さうやら、お母さんのブリギツタかも知れない。ハイディの説明で、ペーテルが一生毎日曜に三錢づつもらふごきになつたわけが、はじめてわかつたのであるから。

おばあさんが一等おしまひに云つた。

「ハイディちゃん、讀歌美を讀んでおくれ。わたしにはもう、勿體ないごきに、これから先きは、生きてゐる間ちう、神様に今までいただいた数々のありがたい御恵みの、お禮さへ申しあげてゐれば、なんにもほかにすることがないやうな氣がするのだから」

(終り)



國民學校と國民幼稚園 (四)

— 文部省講習會講述速記 —

倉橋惣三

講義要項

- 一、國民學校教育の精神
國民普通教育の改革——教育審議會の答申——國民學校教育の本旨——「皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコト」
- 二、國民學校の教育方針と學科
國民學校の教育の目的の主眼點——國民學校の教育の方法の強調點——國民學校の教科
- 三、國民學校と幼稚園
教育審議會の答申——小學校と幼稚園との從來の關係——幼稚園の國民教育上の位置
- 四、幼稚園の史的考察
フレールベルの幼稚園——我國に於ける幼稚園——人文的、社會的——幼稚園の國民教育性——國民幼稚園
- 五、幼稚園と低學年との聯絡
從來の問題の検討——從來の低學年と新低學年——教科の統合——綜合教授問題
- 六、幼兒保育者としての國民學校教科の研究
國民學校教科の教授要旨——國民科——理數科——體操科——藝能科——實業科
- 七、我國幼稚園の將來
幼稚園の國民教育的充實——幼稚園の國民教育的普及——國民幼稚園の非階級性と多様性
- 八、幼兒保育者の責務と自重
幼兒保育者の責務——幼兒保育の目的内容と幼兒保育方法の特質——幼稚園と家庭——幼稚園保姆の向上と養成——幼稚園保育者の自重

六 國民學校教科の研究

更にもう一つ問題を進めまして國民學校の教科科目、あれをさういふ本旨に於て考へられて居るのであらうか、それを取扱ふ取扱ひ方に於てはさういふこゝが特に強調されて居るのであらうか、

從來に於きましても幼稚園の先生は小學校の教育に關する、さうした方面の研究は甚だ不充分であつた時に言はれて居ります。これは甚だ良くないこゝであるが、小學校と幼稚園とは違ふさういふ意味に於て小學校のこゝを研究したこゝろで幼稚園には——子供の將來のためには考へて置かなければならんが——今の保育法には直接參考にはならん。斯ういふやうなこゝを仰しやるにしても、まア一應は理がありげであつたかも知れません。しかし、今度の國民學校の教科及び科目は、あの子供達が行くべき學校の性質を知つて置くためにも皆さんが御研究にならなければならぬのみならず、保育との關係の近さに於ても非常に研究を要するものになつて參つたのでありますが、これを充分に研究するさういふこゝは容易ではありませんので、極く上つ面の走り方ではありますが、お役に立つ程度のお話を申して置かうと思ふのであります。

(イ)そこで先づ國民科、この國民科には修身、國語、國史、地理、この四つを含んで居るのであります。こゝろでこの國民科を見ますと、國民科教授の方針として一番初めにこんな嬉しい言葉で言ひ現されて居るのであります。從來の行き方でありましたならば、國民科はこれ／＼これ／＼のこゝを明かにするこゝ、斯ういふやうに主知的に行くべきこゝろであります、國民科教授の方針としては

皇國ニ生レタル喜ヲ感ゼシメ敬神・奉公ノ眞義ヲ體得セシムルコト

これは幼稚園では出来るこゝろではありません。そのまゝ國民觀念を理解させるさういふこゝろは中々難しい。日本の歴史、地理、これを詳しく教へるさういふこゝろは幼稚園の限度以外であります。然しながら、この「皇國ニ生レタル喜ヲ感ゼシムル」さういふこゝろは、これは赤ん坊にも出来るこゝろであります。幼稚園の子供には充分出来るこゝろであります。また今までしておいでになるこゝろであります。さうして、その國民科さういふ、何か斯う偉い知識でも授けられさうなこゝろで、畢竟は神を敬ひ公けに奉ずるさういふ眞義を、本當の氣持ちを、頭で理解させるのでなく體得せしめるのださういふこゝろならば

幼児にも立派に出来る。昨日、久留島先生から建國童話のお話を伺つて非常に得るどころがありました。神武の帝が、あの美々津の港をお發ちになる、日向からお送りしました者がお別れをする。あの先生の巧みなる話術は日向の純朴なる二千六百年前の民と同様の氣持ちを持つて目頭を熱くしたのであります。あのお話を皆様が上手になさいますならば、その子供に、美々津が何處だか、或は日向が何處だか、それはまア知りませんけれども、「皇國ニ生レタル喜」「敬神、奉公ノ真義」これを體得せしめることが出来る。來年の二月十一日、私はあの小豆餅合せました餅を幼稚園の子供に頒つて居ります。さうして一緒に喰べようと思つて居ります。次に修身の事について斯ういふことが書いてある。

初等科ニ於テハ近易ナル實踐ノ指導ヨリ始メ道德的情操ヲ涵養シ具體的事實ニ即シテ國民道德ノ大要ヲ會得セシムルコト

幼稚園でやつて居るこゝではありませんか、

躰ヲ重シ家庭ト聯絡シテ善良ナル習慣ヲ養フニカムベシ

幼稚園が先にやつて居るこゝではありませんか。國民科の國語については

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ

國語は文字で書いてあるものを讀み、文字で書くと同時に、言葉は話すものであります。その言葉を習得するには話し方といふものが當然重要な位置を持つて來ます。今度の國民科國語では話し方が重要な位置を持つて居ります。その話し方についてさういふことが書いてあるか

話シ方ニ於テハ兒童ノ自由ナル發表ヨリ始メ次第ニ之ヲ醇正ナラシメ併セテ聽キ方ノ練習ヲナスコト

これは幼稚園でやつて居るこゝではありませんか、以後、幼稚園でやつて居るこゝではありませんかといふことを一々言ふのは億劫ですから、斯うします(机を叩く)

發音ヲ正シク抑揚ニ留意シ進ミテハ文章ニ即シテ適宜語法ノ初歩ヲ授ケ醇正ナル國語ノ使用ニ習熟セシムルコト
(机を叩く)

國民科國史については

初等科ニ於テハ肇國ノ宏遠皇統ノ無窮列聖ノ鴻業忠良賢哲ノ事蹟舉國奉公ノ史實等ニ即シテ皇國發展ノ跡ヲ知ラシ

(机を叩く)

斯ういふ難しいことを斯ういふ難しさでやつて居るのではありませんが、今までの國史話、歴史話はこれではありませんか、殊によつたら歴史を歴史として覚えて居なければならん、年代が試験に出たら大變だといふのでなく、皆さんが歴史は過去のことにあらずといふことで表現せしめる時に實に〳〵體得されることであります。

(ロ) 理數科といふのは算數と理科が入つて居りますが、理數科全體について先づ斯う言つて居ります

理數科ハ通常ノ事物現象ヲ正確ニ考察シ處理スルノ能ヲ得シメ之ヲ生活上ノ實踐ニ導キ合理創造ノ精神ヲ涵養シ國運ノ發展ニ貢獻スルノ素地ニ培フヲ以テ要旨トス

と書いてあります。これは一寸難しいのでありますが、これが實際の取扱ひの方に行きますと斯ういふ嬉しいことが書いてあります。理數科の教授方針として五つばかり書いてあります。

分析的論理的ニ考察スル力ヲ養フト共ニ全體的直覺的ニ把握スル態度ヲ重ンズルコト

(机を叩く)

理科大學の學生は實に實に分析的で、實に實に論理的に自然の總てのことを研究してくれなければなりません。が然しながら兒童を相手にした國民教育としての理數科は理學者を作るのではないから全體的に直覺的に把握する。この言葉はこのまゝには使ひませんが、幼稚園の觀察の生命であつたではありませんか、蝶々が居る。花の下に何がある。分解して何がある。顯微鏡で見て何がある。さういふのでなく、蝶を全體的に見て把握する。ボンヤリではないのです。分析しないが全體的といふものがある。論理的ではないが直覺といふ大きな世界がある。理解するといふよりも把握するといふ大きな働きがある。これが國民學校理數科八ヶ年を通じての教育方針になつて居るのであります。

初等科ニ於テハ數・量・形ニ關スル日常普通ノ知識・處理方法ヲ授クルコト

數學を教へよといふのではない。「數・量・形ニ關スル普通ノ知識」を與へる。また「處理方法」を與へる。殊にまた理科についてこんな嬉しいことが書いてあります。

初等科ニ於テハ兒童ノ環境ニ於ケル自然ノ觀察ヨリ始メ

この觀察は幼稚園で使つて居る。あの觀察を引いて來たごそんなに都合よく解釋しなくともいふ、あゝ幼稚園のを奪つてしまつたと言はなくともいふ、言はなくとも宜しいのですけれ共、さういふことが、學理より始め、論理より始め、理論より始めを書いてないところに嬉しさがある。

日常普通ノ自然物自然現象其ノ相互竝ニ人生トノ關係人體生理及ビ自然ノ理法ト其ノ應用ニ關スル事項ヲ授クルコト
さういふことをこゝに現して居ります。

自然ニ親シミ、自然ヨリ直接ニ學ブノ態度ヲ得セシムルコト

實に觀察ではありませんか、その次に

植物ノ栽培、動物ノ飼育ヲナサシメ生物愛育ノ念ニ培フト共ニ繼續的ノ觀察實驗ニヨリテ持久的ニ研究スル態度ヲ養フコト

實に幼稚園そのものではありませんか。その他のこと皆この通りであります。これだけのことを申しましたが、これだけのことを申しましたが、如何に今回改正されたる國民學校が、貴君方が子供のためにこれこそ本當の教育方法であるご、斯う信じてやつて居られましたことゝ同じ原理に基くものであるかが分るではありませんか。而して私が今讀みましたやうな點は國民學校の中でも恐らく低學年に於て最もその充分なる姿を現はすものに相違ないと思ふのであります。

七 我國幼稚園の將來

(一) 傳統を離れて

今まで申上げたやうな次第でありますから、これからの幼稚園は益々國民教育的に充實して來なければならんといふことは當然であります。今までは或は人道的に充實し、或は個人心理的に充實し、或はさうしたものの上に乗つて居ります教育者その人の宗教、或は藝術と言つたやうな點が非常に強く出て來て居つたのであります。これからは國民教育的に充實させなければいかんことになります。ところで國民教育的に充實させるといふことは果してさうすることであるか、これはあきでまた申上げることに致しますが、兎に角これを一刻も我々の念頭から去らないやうにしなければなりません。

もう今日に於きましては、フレーベルの幼稚園を受繼いで居るのでないことはつきりして参りました。今までと雖も我々は決してフレーベルの幼稚園を受繼いで居つたのではない。我々の幼稚園へフレーベルの精神を借り、フレーベルの方法を借りて居つたことはありますけれども、日本の教育施設としての幼稚園そのものはフレーベルを受繼いで居つたのではないのであります。そんなら何を基にして幼稚園を造るかといふ時に、今までは稍々區々であつたかも知れません。心理的、人文的、社會的であつたといふ譯であります。國民學校に連なる國民幼稚園としては實にそこがはつきりして参るのであります。即ち之れからは、幼稚園と言へば直ぐその歴史的起原に還つて行くといふ、あの考へ方を断ち切りまして、こゝに新しく國民幼稚園を造るといふ考へ方で行かなければならぬのであります。内容に於て必ずしもフレーベルに反對するのではない。フレーベルの勝れたる教育的意見、教育的方法、教育原理、これを我々は充分取入れて参るのであります。けれども、我々が幼稚園を造る意圖、本當の魂は、フレーベルによつて出来たあのやり方に感激して幼稚園を造るといふではありません。日本の幼児教育をするがために幼稚園を造る。さうして、そのためにはいろいろの教育方法は何んでも採用し來り、これからもまた良き方法を採用する。こゝにいふ順序であります。即ち幼稚園を傳統によつて考へないで日本の幼児を教育するにはさうしたらいかいふことに純粹に立脚して、そこから幼稚園を出發させて行くといふことが必要と思ふのであります。

(一)更に國民幼稚園である以上には、その内容の本質を國民教育的に充實するのみならず、國民教育的に普及せしめなければならぬと思ふのであります。これは幼稚園令が出ました時に、幼稚園は學齡前幼児のために極めて必要なものである。而してその學齡前幼児の保育は家庭が主になるべきである。しかし、近時の社會趨勢は家庭をして、その任務を充分に果さしめることがだん／＼困難になりつゝある。かるがゆゑにさういふところに向つて幼稚園を造ることが急務である。斯ういふことを言はれて居りました。私共は實に適切な考へ方だと思ふ。而してこれは幼稚園の社會的任務の強調であるといふことは直ぐ判るのであります。然しながら、それはそれで素より實際問題として誤りなき考へ方でありませんが、今度は國民鍊成といふことに基礎を置くのだとするならば、生活層などに拘らず、都市農村に拘らず、國家は國家全般のこゝとして、普遍的に留意しなければならぬといふことになります。幼稚園義務制を主張される方は、この趣旨を徹底させようと思はれるのであると思ふのであります。義務制にすることに於て初めて幼稚園が日本の學齡前幼児全體

を抱擁するところになるのでありますから、それは最も徹底的なところであります。たゞその實現は必ずしも、明日直ぐにさういふことは望みにくいのでせう。そこで、義務制になることは寔に結構なところ、望ましいところであり、それを理想としてつぎめたいのですが、併しながら、義務制を待つ間にも大に普及をはかることに力を用るなければならぬのであります。

私は公立幼稚園が澤山に出来ることを希望致します。公立幼稚園は、即ち國家及び國家の意圖に基く自治體が施設するところのものであります。幼稚園設置義務制、これを目ざしてゐるのであります。斯うなつて参りましたならば、入園義務も亦當然に實現し得るところになるのであります。斯うなることは實に一番望ましいところであります。しかし現状に則して考へますならば、今日我國の幼稚園の中に大きな位置を持つて居りますところの私立幼稚園によつても、大に國民幼稚園としての普及を圖りたいのであります。これは設置義務制といふことは無關係であります。入園者の普及は大にはかれるのですから之れ亦結構だと思ふのであります。たゞその場合私立幼稚園の方々が、即ち公立幼稚園以上に、その人その人の獨自性が出易しい幼稚園が、即ち自分の教育意見でやつていらつしやるのが、自分の兒童愛でやつていらつしやるのが、自分の人生觀でやつていらつしやるのが國民教育的充實に於て少しも公立に變らないものでなければなりません。そうすれば、私立幼稚園であつても、公立幼稚園も少しも差はないのであります。そこで幼児に國民教育をしたいと思感せられる方が、その御精神でドシ／＼私立幼稚園を造られ、設立が私立であつても、その目的が個人的であるやうなやり方でなく、我國の幼稚園は皆國民幼稚園であることに充分になりますれば、即ち幼稚園による國民教育の普及がだん／＼に實現されて行く譯と思ふのであります。

(ロ) 扱てさういふ風に國民教育的に普及したとしますならば、この幼稚園もまた國民幼稚園たることに於て一つでなければなりません。その點では同一でなければなりません。あそこの幼稚園は斯ういふやり方、こつちの幼稚園は斯ういふやり方で、國民教育といふこの本義に於て濃淡がありましたならば許すべからざることであります。そこで、議論でなく實際の問題に引寄せて、私は國民幼稚園の非階級性といふ言葉を假りに使つて見ます。これは甚だ穩當ならざる言葉で、今日の日本人の言葉の中に階級といふ言葉は使はない方がいゝ言葉であります。階級なんてことによつて考へなければならんことはもうないのであります。分りいゝためにこんな字を使つて見ますのは、今日でもまだ幼児教育に生活層の別が随分あると見られるからであります。國民學校に何等の階級性のないことは勿論であります。小學校、特殊小學校

こいふ名前をやめてから小學校に階級性は全然なくなつて居ります。況してや國民學校に階級性のあらう筈はありません。實に日本の子供は悉く同一なる國民學校に於て教育されるのであります。ところが事幼兒の問題になります。また社會的意味こいふ立場から出るものであります。素より階級精神から出るものではありません。社會的こいふ立場から出るのであります。——そこにそんなにやかましく言ふほどの問題でないかも知れませんが、何んさなくまだ勞働階級のためにさか、貧しき人々のためにさか、こいふこまが大層特別に言はれるのであります。勿論大正十五年の幼稚園令が先程申上げました如く示して居りますが、さういふこまでは、家庭教育がつかいお留守になり易いのでありますから一層我々は行つてお援けしたいのであります。山の手に幼稚園を造るよりも、勞働する人々の集まつて居る、あのゴチャ／＼して居るこまに幼稚園を造りたいこいふのが我々の希望でありますけれども、造つた以上は、それは國民幼稚園を造らうとする考が社會的精神から出て來るこいふこま、造つた幼稚園が社會的の何か違つて居るこいふこまはつきり區別されるべきこま、思つて居ります。それがさうも混同して居て、さうして何だかはつきりした言葉でこまで言ふのもおかしいやうな差別が出来て居るげに感ぜられるのであります。これは人間は皆同一であるこいふやうな人道論ではない。子供は皆同一に取扱ふべきであるこいふこまを言ふのではない。そんな意味も私は元より言ひたいけれども、こまでは一つに國民教育の基本さしようこいふ、その意味に於て、實に同一でなければならんこいふのです。私は日本の幼兒教育が國民教育となりました以上、國民幼稚園さ名をつけやうと、國民保育所さ名をつけやうと、國民託兒所さ名をつけやうと、それは大して問題でありません。尤も私は幼稚園さいふ言葉に非常に引付けられて居りますが、もつて現實的の言葉を使つても差支へありませんが、貧しき人々の子供は託兒所で預かる。富める人々の子は幼稚園にこいふ立前がありはしないか。國民さして育てる仕事の上に、一方は上品なる仕事で、一方はそれさ少しく違ふやうな感じを伴ふやうな思ひは絶対に許されないのであります。人間を差別してはいかんこいふ抽象論ではなく、國民に差別はないこいふ通念から、さうしてもさうなるべきものさ私は思ふのであります。國民幼稚園は、そうした意味で、日本に一種しかあり得ないのです。

(ハ)しかし又、斯う申しますと、氣の早い人は、もう何でもかんでも皆同じやうなこまをするのださ考へるかも知れません。私は若し——この講習は離れた話であります——從來の小學校を批評するならば、國民教育機關さして非階級的に行つて居りますこまは寔にいゝが、然しその子供達の住める環境に基いて、その子供達の今住める生活に基い

て、その教育がいろ／＼に多種多様たるべきだといふ原理に於きましては、従來の小學校は聊か不充分でありました。もう少し農村の小學校は、唯、子供が農村的顔をして居るだけでなく、漁村の小學校は何んかなく生臭く、工場の傍の小學校は機械の音で騒がしいといふだけでなく、もつその積極的意味が發揮されていゝ筈であります。さうも工場の音がしていけないといふが、工場の傍の小學校で工場の音がしなかつたら變であります。さういふところは聲の大きな先生が宜からうといふ譯ではありませんが、農漁村はぐつと異つた教育形式が行はれる筈だと思ひます。兎に角今度の國民學校は、こんな邊鄙な所、所謂文化程度の低い所であつても、國民學校たることに於て變りがないけれ共、そこは其の土地らしい教育方法がとられなければならぬといふことは、國民學校として大いに強調されて居るのであります。即ち兒童の生活環境に則して多様でなければならぬといふことを言つて居るのであります。幼稚園も同様國民教育機關として非階級になると同時に、その形態は實に多種多様であることを充分實現しなければなりません。幼稚園は朝何時に始まつて、何時に終るころである。親が忙しからうが有閑だらうが、そんなことは問題ではないといふ風なことは、全く許されないことです。子どもの家庭生活の事情に應じて、適切に行はなければならないものです。

八 幼兒保育者の責務

次に、さういふやうな意味からしまして、幼兒保育者の責務は自重も感ぜられて來ることは申すまでもありません。その點を、蛇足でありますが付加へて置きますならば、國民幼稚園となつた時に幼兒保育者の責務は何も今まで、さう變るまい譯ぢやない。變るにするに今までが問題になる譯ですが、然し一層我々の責任を重大に感ぜしめる點はあります。「私は子供が好きですから幼稚園をやる」なんといふ自分勝手な言分は絶対に禁じられます。七・七贅澤禁令と同じく、それはその方の趣味の贅澤であります。その人が子供が好きであらうと、嫌ひであらうと、學齡前の子供に國民的教育を與へられなければならぬから保育するといふ方を主にしなければならぬのです。一體幼稚園といふものは教育の中の一環詩的のものであります。詩を解せざる人が幼稚園にゐることは聊か不向きなやうであります。一緒に居られるものは詩であります。何も詩と言つても氣取つたことではないので、そこに動いてゐる氣もちが、詩なのです。詩の中に實にしろけて居る。だけれ共、それほ詩的のものですが、詩で遊んで居るのではありません。愛國者が唄つて居る詩なのでありま

す。愛國精神なく、唯フラク、ミ「花が散る」、あゝ散る、私も散りたい」なんて、そんなものではないのであります。「櫻花かや、櫻花かや、東に散り、西に散り、あゝ無常だ」そんな歌を唄つて居るのではなく、あの大和心の花かやさいふ詩なのであります。殊にさういふ意味から、特に事變始まつて以來、幼児保育者の責務は一段々重くなつて居ります。

扱てその責務は重く嚴肅なのですが然し幼児に接するところは常にやさしくないさいかんであります。私は國民幼稚園を強調すると共に、何處の幼稚園に行つても先生は目をギラつかせてゐることを要求してゐるのではありません。國民幼稚園は國民青年學校とは違ひます。國民壯丁訓練所とは違ひます。相手が幼児でありますから、一體が遊び本位で國民意識さいふものミピツタリ合つて居ないかの如く見るものもあります。圖書にしても兵隊さんばかり描かなくとも宜しいのであります。手技にしても實に可愛らしい、無邪氣なものを作り、ホ、ミ笑ひ、ハ、ミ笑ひ、實に和かにやつて宜しいのです。庭もダリアの自然美を抜いて仕舞つて、トマト、ジャガイモでなければいけないさいふのではありません。私は寧ろ、内容に於て國民的自覺の強烈なるものがあればある程、幼児への對し方としては、實に幼児に相應しい方法を探らなければならんミ、強調したのであります。こゝのところが極めて大切であり、又むづかしいところでもあります。

「矢つ張り幼稚園は幼稚園ですヨ」さいふミ「本當に矢つ張り矢つ張りさうやなア」ミ矢つ張りが續く。それでは五日間聴いたが、矢つ張り昔の通りさいふこゝになる。こゝが「國民幼稚園であるぞヨ、國民幼稚園であるぞヨ」さいふミ、何だかまた變つてしまふ。「今度の講習に行つて來たが、幼稚園も凄エミミになつた。」これでは幼児の國民教育は出來ません。そのこゝろが中々言ひにくいのであります。然しそのこゝろを間違へて居る人が世の中にもないこゝろは氣がつくのであります。時間が參りましたから、こゝでお話をやめますが、幼稚園が國民幼稚園なる以上、保母の國民教育的責務は、實に大きくなります。しかも、たゞその精神ばかりでなく、幼児に對しては、こゝまでも幼児の生活特色に基づく保育原理によつてゆかなければならないのですから、國民教育者中の幼児教育者としての、専門的責務は、愈々重大なるのであります。これは言ふまでもないこゝろですが、不十分な講演の結論として、之を附け加へて置きます。お互にしつかりやませう。そして國のために盡ませう。

(完)

倉橋惣三著

定價 送料

育ての心

東京、神田區駿河臺三丁目六

刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法真諦

東京、神田區神保町一丁目六七

東洋圖書株式會社

倉橋惣三共著
新庄よしこ

日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇
同上

倉橋惣三著

幼稚園雜草

東京、日本橋區、大傳馬町

二、五〇〇、一四
内田老鶴圃

日本幼稚園協會編

幼児に聽かせるお話

三、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編

幼児の樂しむお話

二、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編

幼児發達検査

東京、神田、神保町

一、〇〇〇、八
フレイベル館

淡路圓次郎著

幼児性行評定尺度

一、〇〇〇、二
同上

倉橋惣三監修
保育叢書

菊池ふじの著
徳久孝子著

人形芝居脚本

一、〇〇〇、二
同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作

一、〇〇〇、二
同上

膳眞規子著

自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二
同上

和田實著

實驗保育學

一、〇〇〇、二
同上

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽一
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三
 附屬幼稚園主事 倉橋 惣三

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
 - 一、雜誌發行(毎月一回)
 - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ジテニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定規文注

一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます(郵券代用の場合は總て一割増)です
 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます
 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし
 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越し願ひます
 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます
 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋 惣三
 發行所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷者 柴山 則常
 印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 會社 杏林 舍

發行所 日本幼稚園協會
 振替口座東京一七二六六番
 東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

定價

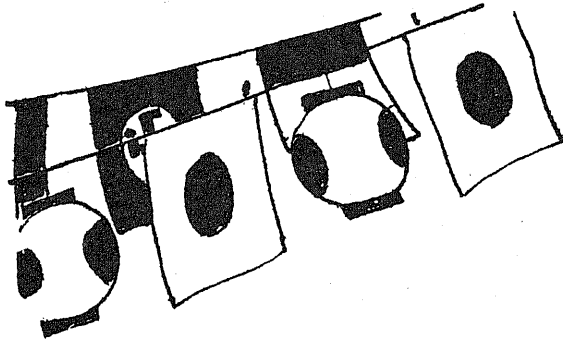
一ヶ月分	金參拾五錢	特等面一頁	二等面一頁
半年分	金貳圓拾錢	金貳圓拾錢	金貳圓拾錢
一年分	金四圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
拾年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
拾貳年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
拾肆年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
拾陸年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
拾捌年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
廿年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
廿貳年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
廿肆年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
廿陸年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
廿捌年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁
三十年分	金四拾圓拾錢	金拾圓一頁	金拾圓一頁

廣告社に御申込下さい
 神田區駿河臺ノ三品田
 廣告社に御申込下さい

昭和十五年十一月二十八日印刷納本
 昭和十五年十二月一日發行
 幼兒の教育 第四十卷 第十二號

たのしいお細工

うれしいお正月、降誕祭。この季節の手技材料がいろいろ取揃ひました。今から拵へてまちませう。戦地の兵隊さんにもあげませう。



- | | | |
|--------------|------|-------|
| ◇ストッキング用織紙 | 五〇組 | 二、八〇錢 |
| ◇星(金銀の美しい星) | 一箱 | 七五錢 |
| ◇柗の葉 | 一箱 | 五〇錢 |
| ◇お誕生祝の鯛 | 一〇〇枚 | 二、二〇錢 |
| ◇國旗の日の丸 | 一箱 | 二五錢 |
| ◇提灯の日の丸 | 一箱 | 二五錢 |
| ◇後藤連繫紙 | 一箱 | 五〇錢 |
| ◇カレンダー掛星形臺紙 | 一〇枚 | 八〇錢 |
| ◇モモタラウカルタ | 一組 | 二五錢 |
| ◇健康カルタ(東京大阪) | 各一組 | 二五錢 |
- その他羽子板材料、獨樂用材料等

食 館 レベレフ 社 會 式 株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本
 番七二八三(24)話電・五町後備・區東・阪大 店 支